



1923



2023

創業100周年記念誌

The Chronicle of Nirakuen



広く大きく 花開く

NIRAKUEN
basic

2023年、創業100周年を迎えた「二楽園」はこれまで
花と緑でいっぱいの美しく豊かな街、自然と共生できる環境づくりを目指し
神戸を中心に花と緑を広げてきました。
次の新たな100年に向けて、私たちは地域社会に役立てる企業として
さらに広く大きく花開く未来を築いてまいります。

明石市

明石海峡大橋

JR神戸線

神戸電鉄粟生線

神戸市

ポート
アイランド



二楽園
本社

二楽園
造園
事業部

宝塚市
二楽園
イオンモール
伊丹昆陽店

伊丹市

山陽新幹線

西宮市

尼崎市

芦屋市

大阪市

六甲アイランド

社 訓

- 一、信用は、繁栄の母
- 一、技術革新は、繁栄の父
- 一、人材育成は、繁栄の基礎
- 一、人の和は、繁栄の近道
- 一、仕事を愛し、会社を愛することは、
繁栄の原動力
- 一、人に社会に奉仕する精神は、
繁栄の精神



創業者 奥谷 奥之助
1888(明治21)年—1941(昭和16)年



社 旗

会社の顔として、さまざまな行事に使用されてきました。
社員にとっても「二楽園」の一員としての自覚と団結力の象徴となる役割を果たしています。



「二楽園」本社エントランス



二代目 奥谷 惟之
1921(大正10)年—2014(平成26)年

二楽園賛歌

作詞 奥谷惟之
作曲 河田信秀

一、
ファッション神戸花の町
かおりゆたかな岡本に
あなたに贈る緑と花を
真心伝えるアレンジメント
永くはぐくむ二楽の園
広く大きく花開く

二、
造園装園ランドスケープ
ビルもオフィスも緑に映えて
部屋を装うインテリアグッズ
素敵なエクステリア マイガーデン
永くはぐくむ二楽の園
広く大きく花開く

三、
心をあわせて誠をもちて
社是を守りて社会に尽くす
永くはぐくむ二楽の園
広く大きく花開く
広く大きく花開く



「二楽園」ロゴマーク

「二楽園」の頭文字“N”を
モチーフにしています。

Nirakuen
Corporate philosophy

『for Amenity “G” life』

私たち二楽園は

『for Amenity “G” life』をコンセプトとして

緑と花いっぱいの美しく豊かな街、
自然と共生できる環境づくりをめざし、
地域社会に役立ちたいと考えています。

《G:green, garden, gift》



代表取締役社長 奥谷 信秀

奥谷 信秀略歴

1957(昭和32)年生まれ。1976(昭和51)年、株式会社大丸東京店に入社。1989(平成元)年、二楽園総合園芸株式会社に入社、取締役就任。1998(平成10)年、代表取締役就任、現在に至る。
兵庫県園芸商協会会長、新しい園芸を考える会副会長、日本園芸商協会監事、イオン同友会理事(現任)など業界団体の要職も多数歴任。

「創業者からの精神」とともに 一層の飛躍と発展を目指して

お陰様で2023(令和5)年、「二楽園」は創業100周年を迎えることができました。これもひとえに、多くの関係者の皆さまの絶大なるご指導、ご支援の賜物と感謝申し上げます。

この記念すべき年に当たり「二楽園」の創業からの理念を確認し、新たな進むべき方向を考え、新たな歴史を創っていく出発点として記念誌を発刊することになりました。

創業者・奥谷奥之助が亡くなって82年経ち、先代・奥谷惟之が亡くなってからも今年で早くも9年経過し、創業初期の話を聴くことができない今日ですが、写真や印刷物、文書類によって一連の歴史を浮かび上がらせることができ、ここに「創業者からの精神」が生きていることを社史の客観的な事実から知ることができました。

これが、長年の間に社風として浸透し、世代を経てなお脈々と生きており、さらに守り続けていくことが、私の使命と考えております。

これからも「二楽園」は、先代が提唱した社訓を正しく理解し、お客さまに必要とされる企業であり続けられるよう、従業員と共に努力し続け、なお一層の飛躍と発展を目指して進んで参りたいと思っております。

景観の「楽園」の実現に向けて

本年「二楽園」は創業100周年を迎えることとなりました。

1923年(大正12年)に創業者・奥谷奥之助氏は、この岡本の地に1,500坪の敷地上に建てた大温室で花卉園芸の生産を開始し、カーネーション・バラ・洋ラン・マスクメロンなどの栽培に成功し、品種改良によるトマトにおいては「医者いらずの二楽園トマト」として大好評を得ました。

しかし第二次大戦末期の神戸大空襲により、この大温室も大破し、戦後の生活物資・食糧不足の苦難の時代を迎えることとなりましたが、この中にあっても、前社長・奥谷惟之氏のもと、バラの生産において「バラの二楽園」と言われるまでの名声を博し、いち早く復興をとげることとなりました。

その後、社名も「二楽園種苗園芸株式会社」から「二楽園総合園芸株式会社」に改め、その社名の「総合」の字句の示す通り、園芸品の小売及び造園業を本格的にトータルの展開し始め、「開発企画室」の充実や、会社の組織の基礎固めにも注力し、会社諸規定の整備・経営管理システムの高度化—コンピューターのソフト開発会社とのタイアップによる販売管理・原価管理・財務管理の一元管理システムの構築—を図って参りました。

また造園業におきましても、「単なる修景の技法」ではなく、私たちの環境が、景観の構成諸要素である花と緑などの共存より「楽園」となることを目指す「装園プロジェクト」を前面に掲げてきましたが、この会社の理念は、今日益々世界的に重要視されるものとなっております。「国連」が標榜しているSDGsのゴール11及びゴール13からゴール15の目標とも軌を一にするものと考えます。

「株式会社二楽園」は、今後とも現社長・奥谷信秀氏のもと、全社員一丸となり、壮大なる「景観の楽園の実現」に向けて切礎琢磨を続けて参りたいと思っております。



取締役顧問 林 泰仁



専務取締役 林 悦久

皆さまに愛され、社会に必要とされる企業へ

「二楽園」は2023(令和5)年をもちまして、創業100周年を迎えました。これもひとえにお客さまをはじめ、お取引先さまの温かいご支援とご愛顧の賜物と、心より深く感謝申し上げます。

また先輩諸賢から受け継ぎ、従業員が皆で築き上げてきた一つひとつが、今日の「二楽園」の礎となり、創業100周年の節目を迎えることができたものと、心より感謝申し上げます。

世界はいま、あらゆるものを取り巻く環境が複雑化し曖昧性を増し、想定外のことが起こりコントロール困難な社会・経済状況に陥っています。そうした状況の中、人間が人間として生きていくには、人間としてのあるべき姿、心の原点に立ち返ることが求められます。物質主義、お金や不動産をはじめ目に見えるもの、形あるものに価値を置く考え方から、自由で多様性、柔軟性に富み、感性、個性、心の喜びといった目に見えないもの、形のないものに価値を置く考え方へと転換し、心を高めていくことが求められています。

そこで、弊社は花と緑を通じて、人の心に、社会に潤いを与え、人が人らしく、人にやさしく、他を重んじ慈しむ心豊かな生活、生きる喜びを提供することを使命とし、そして夢と希望あふれる明るい未来を思い、これからも末永く皆さまに愛され、社会に必要とされる企業であり続けられるよう、人と人との絆を深め、近江商人の「三方よし」の精神で、ともに輝ける新たなステージに向かって明るく元気に笑顔で歩み続けたいと思います。

技術革新の時代にこそ人の心を癒す花と緑の力を

創業100周年という大きな節目の年を迎え、まずは長年にわたり「二楽園」をご支援・ご指導頂いた幾多のお客さま、お取引先の皆さまに心より感謝申し上げます。また、花卉園芸・造園、装園を柱とした事業を築き広めてきた、多くの先人の方々の努力と、この礎を引き継ぎ、更なる創意工夫を重ねてきた社員の弛まぬ努力にも、深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

私は阪神・淡路大震災以降の当社にとっても大きな復興時期、本社本店の高層ビル化や造園部芦屋移転頃の2000(平成12)年に、会長、社長からお誘いを受け当社の一員に加わり、約四半世紀、主に造園部門を統括する役割を担ってきました。当社の強みである緑花を選び育てる知識・技能・技術を持った社員が、今以上に活躍できる方法を模索する中、CADやCGなどによる提案力強化を一つの戦略に、他社との差別化、地域一番店化の確立に向け試行錯誤をして参りました。

今後も当社の植物提案力・デザイン力・施工技術力が、公共や民間でも評価いただけるよう「二楽園」のブランドイメージを守り育てる活動を継続的に取り組む事が不可欠と考えております。

高齢化による人員対策、事業の継続、官民の緑化への経費意識の変化など社会の変化に対応した課題が山積みではありますが、技術革新の時代にこそ人の心を癒す花と緑の力は決して消えることはないと思っています。

これからまた皆さまと力を合わせ、次の節目を迎えられますよう努力していきたいと思っております。



常務取締役 奥谷 雅博

1923-1945年

大正12-昭和20年



第1章

「二楽園」の創業

大正12年	「二楽園」設立
大正12年	関東大震災
昭和11年	2.26事件
昭和16年	奥谷惟之が二代目園主として「二楽園」を引き継ぐ
昭和16年	太平洋戦争始まる
昭和20年	神戸大空襲で、大温室が大破
昭和20年	天皇、「終戦の詔書」を放送(玉音放送)
昭和21年	小売業スタート
昭和21年	日本国憲法公布
昭和23年	二楽園種苗園芸株式会社を設立
昭和23年	奥谷惟之が取締役社長に就任
昭和25年	造園部と貸鉢部を開設
昭和26年	サンフランシスコ平和条約調印
昭和34年	社名を二楽園総合園芸株式会社に改称
昭和39年	東京オリンピック1964開催
昭和47年	沖縄返還
昭和55年	芦屋店・パフィオ DE ニラク オープン
平成元年	消費税開始(3%)
平成3年	六甲アイランド店オープン
平成9年	神戸ファッションプラザ店オープン
平成9年	消費税5%に
平成10年	阪神事業本部を開設
平成10年	二楽園グリーンステージオープン
平成10年	奥谷惟之が取締役会長に、 奥谷信秀が代表取締役に就任
平成12年	本社ビル竣工、本店もリニューアルオープン
平成14年	神戸ファッションプラザ・ニラクエンオープン
平成21年	西神中央店オープン
平成24年	ニラクエン北神戸店オープン
平成24年	甲南山手店オープン
平成25年	社名を株式会社二楽園に改称
平成26年	消費税8%に
平成29年	北神戸basicオープン イオンモール伊丹昆陽店オープン
平成31年	NIRAKUEN basicオープン
令和元年	消費税10%に
令和2年	第1回新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言
令和5年	創業100周年

創業者・奥谷奥之助の生い立ち

大日本帝国憲法が公布される前年の1888(明治21)年10月1日、「二楽園」創業者の奥谷奥之助は福井県今立郡今立町(現越前市)にて、父太藏、母すよの長男として生を受けます。

姉と4人の妹の中で育った奥之助は1906(明治39)年より、徳川家ゆかりの福井城主松平家の農業試験場「松平試験場」に

おいて植物学を学び、1909(明治42)年4月から1914(大正3)年12月までは試験場で助手として働きます。当時のアルバムには松平試験場での作業風景や、収穫物を前に談笑する姿などが収められています。

松平試験場はかつての福井藩主、越前松平家が創設した試験農場で、最後の藩主となった松平茂昭の子である松平康荘がイギリスのサイレンセスター王立農学校に留学し、帰国後の



初代 奥谷奥之助



1893 (明治26) 年に福井城跡に創設。本丸から三の丸にかけて開墾し、果樹や野菜など多様な農作物を栽培しました。帰国の13年後には園芸伝習所をつくり、世に園芸技術者142人を送り出すなど農業振興に功績を残しました。

健康を害したことが転機に

松平試農場で働き始めて4年後の1913 (大正2) 年に鯖江市中野町の山田九左衛門の長女倭文子しづこと結婚します。

結婚から2年後、奥之助は1915 (大正4) 年、奈良県吉野郡にて時の実業家、日本綿花 (現ニチメン) 社長、喜多又蔵氏所有の二百町歩*の果樹園経営を任されます。1921 (大正10) 年に



奥之助は前列右から2番目。



左が奥之助。



左端が奥之助。



1911 (明治44) 年10月松平試農場にあった温室の前で。左端が奥之助。

なると、その力量を買われて敷島紡績の前身である近江紡績の支配人となりますが、健康を害しそれを辞します。

健康を害した奥之助は園芸に生きることを決意し、1923 (大正12) 年に神戸市東灘区岡本の地に「二楽園」を興しました。奥之助は自身の園芸事業だけではなく、神戸中央花市場 (現在の兵庫県生花市場) の開設にも奔走し、兵庫県における花卉市場の成立に力を尽くしましたが、1941 (昭和16) 年11月25日に53歳で惜しくも生涯の幕を閉じます。

※一町歩は約3,000坪



神戸中央花市場 (現在の兵庫県生花市場) の設立に参加した有力事業者の方々 (奥之助は前列右から2番目)。

【福井城内を荒らしたオオカミ】

1910 (明治43) 年8月3日、福井城内に野犬が潜入したとの情報が伝わり、場内を搜索しましたが発見されませんでした。しかし夕方になって寄習舎付近に現れ、ちょうど現場に居合わせた奥之助が銃で射止め、研究生ほか2名と補殺します。その後、動物学教諭によって野犬ではなくニホンオオカミだと鑑定され、当時のニュースで



オオカミを射止めた当日の写真。中央が奥之助。出典:松平文庫 (福井県文書館保管)

は「オオカミ城内を荒らす」として大々的に扱われました。試農場は奥之助に柳行り一組と園芸調査書一冊を与えて賞し、松平邸からも賞賜がありました。

1923-1945年

大正12-昭和20年

4人の子宝に恵まれて

奥之助と倭文子は4人の子宝に恵まれました。結婚から3年後の1916（大正5）年2月24日に長男正典が誕生します。その後1918（大正7）年7月22日に次男和喜夫が、1921（大正10）年10月21日には後に後継者となる三男惟之が、1924（大正13）年3月には四男の清成が誕生します。

当時はさまざまな時代背景もあり、長男正典は大阪の商社丸江より赴任中の中国の青島にて腸チフスに感染、1939（昭和14）年3月11日に23歳の若さで他界します。次男和喜夫は第二次世界大戦で豪北ビヤク島玉砕により1944（昭和19）年12月9日に戦死。四男の清成は1925（大正14）年2月、1歳の誕生日を目の前に短い生涯を終えます。

ただ1人残された三男惟之は、1945（昭和20）年3月3日、照子と結婚。奥之助亡き後の「二楽園」の事業を引き継ぎ、第二次世界大戦終戦後は母倭文子、妻照子とともに「二楽園」の再建に努めました。



1915（大正4）年5月奈良に引っ越して間もないころの奥之助（28歳）と倭文子（22歳）。奈良県五條市阿田峯で撮影されました。



満1歳の長男正典。



次男和喜夫。



三男惟之1歳の頃。



1924（大正13）年4月、生まれたばかりの四男清成と惟之。

故郷に建立されたモニュメント

奥之助は、紡績会社の工場長を勤めた技術者でもありましたが、健康を害してからは園芸に生きることを決意し、岡本に「二楽園」を設立しました。出生地の福井県には、奥之助・妻倭文子の業績を称えるモニュメントが建立されています。

なお、このモニュメントの建設は実弟・奥谷厚蔵が施工し、初代出生の地と奥之助の興した二楽園の発展に寄与されることを願って建立されました。



長男正典(彦根高等商業学校卒業アルバムより)。



次男和喜夫(関西学院大学卒業アルバムより)。



三男惟之36歳、1957(昭和32)年の「二楽園」社員旅行にて。

花のモニュメント

玉は二楽園の祖 奥之助と内助の功大なる妻倭文子
五枚の花びらは、取り囲む人々
輪になった花びらは 時ふるとともに魂を高め
真中深き 玉の輝きとなり 永遠の光りとなる

故郷の屋敷の西北の杉木立
澄んだ青空に 未来をさし示すモニュメント
玉を抱いて伸びゆく二楽園



奥谷倭文子

【「二楽園」を陰で支えた奥之助の妻倭文子^{しずこ}】

奥之助と同郷の妻倭文子は、1894(明治27)年に鯖江市中野町の山田九左衛門の長女として生を受けます。古代の美しい織物「倭文」^{シズ}、「倭文機」^{シズイロ}にちなんだ名前は、万葉歌などに繰り返し詠まれる「倭文」の文字を、父九左衛門が古文古歌の中から選んで授けました。

授けました。

女性の社会進出はもちろん、進学する女性も少ない時代に、倭文子は福井師範本科を修めたのち、教壇にも立つ才媛でもありました。

1913(大正2)年に奥之助と結婚し、4人の子宝にも恵まれます。しかし、四男を生まれて間もなく亡くし、長男が赴任先の中国・青島で病に倒れ、次いで夫の奥之助を病で、次男を戦争で亡くします。母とし



「人気投票で景品が当たる!」として人気を博したダリア展開催中の「二楽園」店頭にて。

て妻として辛く悲しい日々の中、1人残され21歳の若さで「二楽園」の事業を継いだ三男の惟之を支え、家族はもちろん会社も支え、長年「二楽園」の監査役をつとめます。不正や偽りに遭うと毅然と拒否し、反面、町会や老人会などでは町づくりの推進役をこなすなど、地元への貢献活動にも精力的に参加しました。

1993(平成5)年3月18

日に99歳でこの世を去るまで創造心を忘れず、一線を退いても存在感を放ち続けた倭文子は「二楽園」の名実揃った監査役であり、長年にわたり「二楽園」を支え続けた陰の功労者といえます。



96歳を目前に控えた1990(平成2)年6月の黄綬褒章受章祝賀会にて、フラワーアレンジメントを施したマイクで歌を披露。

1923-1945年

大正12-昭和20年



温室内でのトマト栽培

「山の手族御用達」モダンな園芸店の誕生



洋ラン献上にあたり、天皇陛下に粗相があつてはならぬ
ということで、献上前には家中が消毒されました。

「二楽園」は1923
(大正12)年、まだ
農村風景が広がる
神戸市東灘区岡本
の地で産声をあげま
した。創業者の奥之
助は米国式の大温
室を建設し、カー
ネーションやバラ、
洋ランのほか、メロ
ンやスイカ、トマト、

ブドウなど、当時珍しかった花や高級フルーツを栽培する、「山の手族御用達の園芸づくり」をコンセプトにしました。資料として残る温室内でのトマト栽培の写真には、トマト苗がずらりと並び、その奥行きからも非常にスケールの大きな温室であったことがうかがえます。

この当時は自家用車で山の手の子が買物に訪れ、輸入品などの高級食料品などを中心に扱う大阪の「明治屋」が店頭商品用に頻繁に仕入れにきていたといいます。まさに、大正から昭和初期の「阪神間モダニズム文化」を体現した、ハイカラな園芸店であったわけです。



戦後に建設された二代目の温室(初代の温室は神戸大空襲での被弾により大破しました)。

この頃「二楽園」では洋ランの温室栽培も手がけます。当時から洋ランは特殊な技術や設備が必要な、栽培が非常に難しい植物でしたが、奥之助は鉢ものの栽培も巧みで、天皇陛下ご来神の折には、二度にわたり洋ラン献上の栄を賜りました。

「二楽園」の象徴でもあった大温室

奥之助が建設した米国式の大温室は、地下ボイラー室や給水ポンプなど、当時としては非常に珍しい近代設備を備えた温室で、規模もとても大きいものでした。戦前の理科の教科書には「温室」という項目があり、小学生がよく社会見学で「二楽園」の温室を訪れていたといいます。

昭和初期の「二楽園」周辺



地図は1935(昭和10)年6月30日 陸地測量部発行の1万分の1地形図「蘆屋」[御影]の一部を使用したものです。

大温室には散水用のタンクがついた、当時としては一際目立つ高さの給水塔も建てられていました。塔には「二楽園」の看板が大きく掲げられており、国道二号線を走る自動車からでもよく見えるランドマークとなっていました。戦後は給水用鉄管が売り払われ、給水ポンプとしての役目は終えていましたが、阪神間の人々に「二楽園」の名を知らしめた広告塔として、重要な役割を果たしました。

請願駅「摂津本山駅」の誕生

「二楽園」の店舗のすぐ向かいに位置する摂津本山駅は、地元からの要望により開設された請願駅で、国鉄（現在のJR）が30%、地域が70%を負担するかたちで1935（昭和10）年に完成しました。「二楽園」も当時、北側のプラットフォームあたりまで

あったバラ畑を提供しました。地元の皆さまに親しまれる、摂津本山駅前の顔としての「二楽園」の始まりでもあります。



広告塔となった給水塔

【「二楽園」社名のいわれ～阪神間モダニズムの象徴「二楽荘」に由来～】



「二楽園」の創業77周年にあたる2000(平成12)年に新社屋ビル「ガーデンライフ岡本」が完成。社名のいわれとなった「二楽荘」のレリーフを作り末長く顕彰するものとされました。

内部は英国室、支那室、アラビア室、インド室、エジプト室などに分かれ、建築様式や家具・調度類で各国の雰囲気を出していました。気象観測を行う測候所やマスクメロンなどを栽培した温

「二楽園」が創業された神戸市東灘区岡本の六甲山麓には、明治時代に大規模な中央アジア探検隊を派遣したことで知られる西本願寺門主・大谷光瑞氏が建設した大邸宅「二楽荘」がありました。「海と山を楽しむ」という意味を持つ名称の「二楽荘」は総面積24万6千坪の広大な邸宅で、地下1階、地上2階建ての木造建築となっており、インドのタージマールを模したといわれた洋館は「本邦無二の珍建築」と評され、赤いスレート屋根の西隅にはドームがそびえ、避雷針を兼ねた尖塔が伸びていました。

室も造られており、山麓から設置された3本のケーブルカーが各施設をつなぐ、壮大なスケールの建物でした。

奥之助は、花を納品していた縁もあり、当時の阪神間モダニズムを象徴する存在であった「二楽荘」の名前にちなみ、社名を「二楽園」としました。残念ながら「二楽荘」はその後、1932（昭和7）年に火災のために焼失してしまいますが、六甲山麓にあった夢のような洋館の伝説は当社の社名に往時のよすがを残しながら、その後もときおり書籍や展覧会に取り上げられるなどしています。



「二楽園」新社屋ビルのガーデンライフ岡本の屋上には「二楽荘」西隅にそびえていたドームを再現。当時を思わせる避雷針が空に向かって伸びています。



1946-1973年

昭和21-48年

第2章

戦後の復興から「

大正12年	「二楽園」設立
大正12年	関東大震災
昭和11年	2.26事件
昭和16年	奥谷惟之が二代目園主として「二楽園」を引き継ぐ
昭和16年	太平洋戦争始まる
昭和20年	神戸大空襲で、大温室が大破
昭和20年	天皇、「終戦の詔書」を放送(玉音放送)
昭和21年	小売業スタート
昭和21年	日本国憲法公布
昭和23年	二楽園種苗園芸株式会社を設立
昭和23年	奥谷惟之が取締役社長に就任
昭和25年	造園部と貸鉢部を開設
昭和26年	サンフランシスコ平和条約調印
昭和34年	社名を二楽園綜合園芸株式会社に改称
昭和39年	東京オリンピック1964開催
昭和47年	沖縄返還
昭和55年	芦屋店・ハフィオ DE ニラク オープン
平成元年	消費税開始(3%)
平成3年	六甲アイランド店オープン
平成9年	神戸ファッションプラザ店オープン
平成9年	消費税5%に
平成10年	阪神事業本部を開設
平成10年	二楽園グリーンステージオープン
平成10年	奥谷惟之が取締役会長に、 奥谷信秀が代表取締役就任
平成12年	本社ビル竣工、本店もリニューアルオープン
平成14年	神戸ファッションプラザ・ニラクエンオープン
平成21年	西神中央店オープン
平成24年	ニラクエン北神戸店オープン
平成24年	甲南山手店オープン
平成25年	社名を株式会社二楽園に改称
平成26年	消費税8%に
平成29年	北神戸basicオープン イオンモール伊丹昆陽店オープン
平成31年	NIRAKUEN basicオープン
令和元年	消費税10%に
令和2年	第1回新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言
令和5年	創業100周年

瓦礫と化した敷地からの再出発

1941(昭和16)年も終わろうとする頃、初代創業者である奥之助が惜しくもこの世を去り、二代目となった惟之は21歳の若さで「二楽園」の事業を引き継ぎます。この頃から第二次世界大戦の戦局は悪化の兆しを見せ始め、終戦を迎える頃には岡本一帯も激しい空襲に見舞われました。

九死に一生を得て福井県に疎開していた惟之・照子夫妻も、終戦後ようやくの思いで岡本へと戻りますが、一面の瓦礫と化した敷地を整地することから「二楽園」の復興は始まりました。荒れ果てた敷地で、戦後間もなくの厳しい再出発を余儀なくされた惟之は、激しい空襲で大破した大温室の鉄材をスクラップとして切り売りすることで日々食いつなぎながらも、新たな商機をうかがっていました。

進駐軍のPX時代と小売業のスタート

終戦直後から神戸にも進駐軍が押し寄せ、神戸大丸も一部が進駐軍PX(軍の購買部)となっていました。ちょうどその頃惟之は進駐軍に知遇を得て、この神戸大丸の進駐軍PXで切り花を販売するチャンスを得ます。

この進駐軍とのビジネスは「二楽園」の戦後復興への大きな転機となります。進駐軍のPXとなっていた神戸大丸の1階にあった花売場を担当することとなり、カーネーションやバラ、スイートピーなどの販売を始めます。これが「二楽園」の小売業のスタートとなりました。

戦後の物資が不足したこの時代に花卉商品を確保するのは容易ではなく、惟之は生産地をたずね歩き、淡路の水仙や明石の菊など各地で仕入れ先の開拓に奔走します。また、単に花を仕入れるだけではなく、伊丹の栽培家との契約には、バーターとして進駐軍の石炭や電話開通の紹介をするなどして大いに喜ばれたといえます。



バラの二楽園」へ

間口3間の店舗から小売の再開へ



戦後の厳しい窮乏生活からようやく人々の表情に笑顔が戻り始めた1948（昭和23）年、惟之は庭園の一角に間口3間、奥行き2間半の店舗を構え、種苗や鉢ものの小売りを本格的に再開しました。この店舗での営業は5年間となり、その後はさらに店舗を拡張していきます。



5年後に拡張された店舗風景。左側の日本語看板の家屋が最初の店舗部分です。

「バラの二楽園」へ

1952（昭和27）年には京大植物園から200株の仏種バラをわけもらい、バラ花壇を造園します。第二次世界大戦後に平和への願いを込めて命名された「ピース（Peace）」などを含むバラで満開のバラ園には、マスコミや見物客が殺到して人気を博し、世の中のまだ低かった花に対する関心が高まるきっかけにもなりました。

また、これを知った神戸市が、戦後の市民生活に潤いを与えようとバラ協会を設立することを呼びかけました。大丸では年2回のバラ展が開催されるなどして、「二楽



1952（昭和27）年5月第1回バラ展示会



バラ園にて惟之・照子夫妻
1953（昭和28）年5月20日

園」も第1回目から参加。一躍世間に「バラの二楽園」の名が広まっていきました。

特賞を独占したモダンで斬新な発想

進駐軍とのビジネスをきっかけに、惟之は米軍将校やアメリカ人花屋から欧米仕込みのフラワーデザインや商品知識を吸収していきます。これにより、これまでの日本の花屋にはなかったさまざまな商品の仕入れや演出方法を大胆に展開、他店にはない新しい特色も強く打ち出されていきました。



1955（昭和30）年には、惟之は進駐軍のアメリカ人から習得した欧米式の花の演出方法を応用して独自のフラワーデザインを考案し、神戸市のコンテストで上位の特賞を独占しました。近くの鉄工所にオーダーした曲線の鉄芯に花をアレンジしたシンプルなものでしたが、竜宮城や松竹梅をかたどった「立花」というスタイルが常識だった時代に、惟之のデザイン感覚はたいへんモダンで斬新な発想と映りました。



惟之が考案したフラワーデザイン

「二楽園」の造園事業

戦後からの復興で街も変化を遂げるなか、1950（昭和25）年になると「二楽園」では造園部と貸鉢部を開設。造園事業やインドアグリーン事業の基礎を築きます。その5年後の1955（昭和30）年ごろには兵庫県、神戸市、西宮市などから造園・土木工事の発注をいただくようになり、官公庁を中心に造園諸工事分野にも事業を拡張していきます。



六甲海星病院の工事現場 1958（昭和33）年

1946-1973年

昭和21-48年

2度目の店舗拡張と社名変更

1950年代後半に入ると、造園・土木工事の発注が増えるとともに店舗販売も好調となり、1959（昭和34）年には社名も「二楽園綜合園芸株式会社」に改称。花卉小売部門と造園部門を両輪とする「総合力」を企業精神に、さらなる邁進を目指していきます。翌年の1960（昭和35）年には店舗をさらに拡張。その後のリニューアルを経た店舗は「岡本店」として、1995（平成7）年の阪神・淡路大震災まで長らく愛されました。



1983(昭和58)年当時の新店舗



その後リニューアルされ、阪神・淡路大震災まで長らく愛された「岡本店」

摂津本山駅前顔として

「二楽園」といえば摂津本山駅前顔として、当時から地元の方々に親しまれてきました。また、ここを通学路とする甲南

大学の学生たちにとっても、青春時代の1ページに記憶されている風景でもあるようです。この駅が請願駅として開設される際「駅ができることは大切なこと」と、開設に賛成した惟之の母倭文子にはこの風景が見えていたのかも知れません。



米国視察「4ダース花の旅」

全国約4,100店（2023年時点）のネットワークで連携され、遠く離れた人にも気軽に花が贈れるサービス「花キューピット」は、1953（昭和28）年に22名（店）の会員で創立された「一般社団法人JFTD」の生花通信配達システムで、東京を中心として発足し、その後地方にも広がり「二楽園」もいち早く加盟しました。

日本人の海外渡航自由化が始まってちょうど1年後の1965（昭和40）年4月、JFTDでは第1回海外研修が実施されました。第二次世界大戦後、GHQによる物価安定・緊縮財政政策によって、1ドル=360円に固定されていた時代のことで、1人年1回、海外持ち出し500ドルまでの制限付きで海外への観光旅行が可能となったばかりでした。

【二代目奥谷惟之の生い立ち】



1983(昭和58)年「二楽園」60周年記念パーティーでの惟之・照子夫妻(三宮ターミナルホテルにて)。

二代目となる奥谷惟之は、1921（大正10）年10月21日に奥谷奥之助・倭文子の4人兄弟の三男としてこの世に生を受けます。惟之には2人の兄と弟が1人いましたが、病や戦争により3人とも若くして他界してしまいます。また、兄弟がこの世を去るなか、父奥之助も53歳で他界。母倭文子と2人残された

惟之は21歳の若さで「二楽園」の事業を引き継ぎます。

父奥之助の他界から4年後、第二次世界大戦の終戦直前の1945（昭和20）年3月3日、惟之は照子と結婚します。それから半年後に

終戦を迎え、厳しい時代背景のなか、母倭文子、妻照子とともに「二楽園」の再建に努めました。

第二次世界大戦や阪神・淡路大震災など、幾多の苦難を経験しながらも、奥之助から受け継いだ「二楽園」をさらに大きく育て、その名を全国的なものにした惟之は、社業のみならず業界の発展にも尽力します。人材育成を目的としたデザイン学校の設定など、業界で働く子弟の教育に熱心に取り組むとともに、兵庫県造園園芸総合事業協同組合、兵庫県インドアグリーン協会、兵庫県園芸商協会、日本園芸商協会、日本生花通信配達協会など、業界団体の要職も多数歴任。また1990（平成2）年には永年の功績により、黄綬褒章を受章するなど、さまざまな功績を残しながら2014（平成26）年2月、92歳で花と緑とともに歩んできた人生の幕を閉じます。



1990(平成2)年には黄綬褒章を受章。



「北米ハワイ花卉事情視察団」として51名が「営業の内部を覗く」旅に出かけます。これは「4ダース花の旅」と名付けられ、1965（昭和40）年4月21日から5月5日まで、アメリカのフラワーデザイン界をはじめとした花卉業界を視察する2週間の旅となりました。「4ダース花の旅」と名付けられたのは、当時のアメリカの新聞に「4ダースの日本人」と掲載されたことが由来とされており、日本国内はもとよりアメリカでも大きなニュースになっていたことがうかがえます。

視察は大成功を収めた貴重な旅に

視察団の旅は到着したシカゴで1泊した後、ニューヨークで3泊し、サンフランシスコで2泊、その後ロサンゼルス、日帰りでラスベガスへ、ここで4泊してハワイには5月1日に到着。5月3日にはハワイ島に日帰りで見学に行き、5月4日には羽田に帰国するというハードスケジュールのツアーとなりましたが、北米ハワイ花卉事情視察団の文字通り、その道の専門家がその関係ルートの協力により、その専門分野を勉強するという当時としては非常に貴重な視察になりました。帰国後、惟之はアメリカの花屋でのレベ

ルの高さを幾度となく話していたといいます。

厳しいスケジュールとなったものの、JFTDによるこの第1回海外研修ツアーは大成功を収め、それ以降のツアーも成功に導いたとされています。

— 装園 —

今から40年ほど前の1983（昭和58）年頃、「二楽園」では「装園」というコンセプトワードを掲げました。植物を育てる「園芸」でもなく庭園などをつくる「造園」でもない、現代ではすっかり定着したガーデニング的な発想をいち早く取り込んだコンセプトである「装園」を広く内外に提唱。「いつか花で庭を飾る時代が来る」という確信のもとに新しい市場分野を切り開いてきました。

その後、日本でも徐々に庭やベランダで草花を植栽したり、柵や石畳などで装飾するなどして庭づくりを楽しむ、まさに「装園」の発想でもあるガーデニングが人気となっていきます。その人気の波は次第に大きくなり、「装園」のコンセプトワードを掲げた約10年後、1990年代半ばから後半にかけて、日本で初めてのガーデニングブームが到来しました。

今ではすっかりおなじみと

なった「ガーデニング」という言葉が流行語10選に選ばれたのもこの頃、1997（平成9）年のことでした。



1963（昭和38）年頃の「二楽園」



1974-2003年

昭和49-平成15年

第3章

小売部門と造園部門

大正12年	「二楽園」設立
大正12年	関東大震災
昭和11年	2.26事件
昭和16年	奥谷惟之が二代目園主として「二楽園」を引き継ぐ
昭和16年	太平洋戦争始まる
昭和20年	神戸大空襲で、大温室が大破
昭和20年	天皇、「終戦の詔書」を放送(玉音放送)
昭和21年	小売業スタート
昭和21年	日本国憲法公布
昭和23年	二楽園種苗園芸株式会社を設立
昭和23年	奥谷惟之が取締役社長に就任
昭和25年	造園部と貸鉢部を開設
昭和26年	サンフランシスコ平和条約調印
昭和34年	社名を二楽園総合園芸株式会社に改称
昭和39年	東京オリンピック1964開催
昭和47年	沖縄返還
昭和55年	芦屋店・パフィオ DE ニラク オープン
平成元年	消費税開始(3%)
平成3年	六甲アイランド店オープン
平成9年	神戸ファッションプラザ店オープン
平成9年	消費税5%に
平成10年	阪神事業本部を開設
平成10年	二楽園グリーンステージオープン
平成10年	奥谷惟之が取締役会長に、 奥谷信秀が代表取締役役に就任
平成12年	本社ビル竣工、本店もリニューアルオープン
平成14年	神戸ファッションプラザ・ニラクエンオープン
平成21年	西神中央店オープン
平成24年	ニラクエン北神戸店オープン
平成24年	甲南山手店オープン
平成25年	社名を株式会社二楽園に改称
平成26年	消費税8%に
平成29年	北神戸basicオープン イオンモール伊丹昆陽店オープン
平成31年	NIRAKUEN basicオープン
令和元年	消費税10%に
令和2年	第1回新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言
令和5年	創業100周年

高度経済成長期と市場の活況

1964(昭和39)年の東京オリンピック、1970(昭和45)年の大阪万博開催と日本経済は高度成長期となり、歩調を合わせるように花卉・園芸の市場も活況を呈していきます。「二楽園」も小売だけでなく造園土木や外構工事などの造園事業拡充を進めます。造園事業では、一般住宅はもちろん神戸市や西宮市をはじめとする公園や公共施設の緑化、修景などを手がけ、大規模な造園プロジェクトにも自治体からの指名がもらえるようになっていました。

「二楽園」は1959(昭和34)年に社名を「二楽園総合園芸株式会社」に改称していますが、「総合」ではなく「綜合」として、いるところに「二楽園」の企業精神が表現されています。総花的な園芸企業になるのではなく、どこにも負けない専門知識を持ったプロフェッショナル企業になるのだ、という決意が込められた「綜合」の文字通り、花卉小売部門と造園部門を両輪とする「綜合力」は、さまざまな公共工事や大規模プロジェクトにおける造園土木で発揮されていきました。

黄綬褒章を受章

1990(平成2)年、奥谷惟之は黄綬褒章を受章しました。黄綬褒章は農業、商業、工業等の業務に精励し、他の模範となるような技術や事績を有する人に授与される日本の栄典の一つです。

花と緑とともに人生を歩んできた惟之は、社業のみならず業界の発展にも尽力し、人材育成を目的としたデザイン学校の設立をはじめ、兵庫県造園園芸総合事業協同組合、兵庫県インドアグリーン協会、兵庫県園芸商協会、日本園芸商協会、日本生花通信配達協会など、業界団体の要職も多数歴任、その功



を両輪に「綜合力」を発揮

【地元に愛される桜守公園】

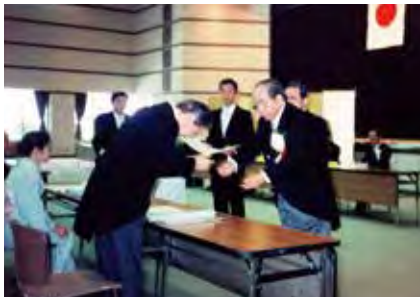
1981(昭和56)年、水上勉の小説「櫻守」のモデルとなった、桜の研究・保護に一生を捧げた桜博士・笹部新太郎氏の邸宅跡に「岡本南公園(=通称・桜守公園)」が誕生しました。生前「自分が死んだ後、家は壊してもこの桜だけは残してほしい」



と話していた笹部新太郎氏の遺志を受け、神戸市によって残され、地元の方々を中心とする「桜守会」がこの公園をボランティアで管理することとなり、弊社はそのお世話役として、長年公園メンテナンスを続けていました。

績を認められての受章となりました。

兵庫県の業界祝賀会では当時の兵庫県知事、貝原俊民氏をはじめ多くの方にお祝いいただき、「二楽園」の強みを活かしたフラワーデザインによる兵庫県の鳥「コウノトリ」を展示するなどしました。



「二楽園」主催での祝賀会の記念撮影。

阪神・淡路大震災の発生

1995(平成7)年1月17日、未曾有の大災害となった阪神・淡路大震災が発生します。震源に近い神戸市の市街地の被害は甚大で、「二楽園」があった東灘区も大きな被害となり、社屋や店舗の建物の被害は少なかったものの、花鉢が全て割れてしまい資材も全て使えなくなっていました。

震災後は商品の仕入れもできない状態が続き、営業停止状態となりますが、約1ヶ月後にはお店を再開します。インフラも混乱したままで交通機関も機能していないなか、売上は落ち込

みましたが、震災の休業助成金等も利用させてもらいながら営業を続けました。

震災以後、地方出身の従業員のなかには家族の希望もあり地元に戻るために離職を余儀なくされた者もいましたが、残った従業員の生活を守ることを第一に、全員一丸となってたて直しを図る日々でした。震災直後は小売事業も厳しい状態が続きますが、造園事業は仕事が全くなってしまう。そこで街の大部分が壊滅的な状態となるなか、造園業者も倒壊家屋の解体ができるようにと一般社団法人神戸市造園協会が神戸市に陳情書を提出。神戸市でも解体工事が追いつかない状態が続いていたこともあり陳情が通り、その後1年ほどは「二楽園」の造園事業部は解体工事も手掛けました。本来の作業とは異なるため困難もありましたが、とにかく従業員の生活を守ることを優先。従業員たちの頑張りもあり、震災後の夏の賞与も支給することにしました。

—「花に水をやれ」—

未曾有の大災害となった阪神・淡路大震災に多くの人が茫然自失となるなか、災害発生の当日に惟之は「花に水をやれ」といいます。現在の三代目で、当時副社長であった息子の信秀は呆気に取られますが、続く「戦争じゃあるまいし、すぐよくなる」の言葉にハッとさせられたといっています。



突然の大災害に多くの人がただオロオロするなか、昭和初期の阪神大水害では東海道本線の線路が泥に埋没し、氾濫した住吉川の川上から牛や馬が流れてきたのを目のあたりにし、その後の第二次世界大戦では疎開先で福井空襲に遭い、戦争が終われば神戸大空襲で瓦礫と化した敷地を整理してきた惟之には、甚大な被害を受けた街の姿にも、すでに復興のその先が見えていたと感じる深い言葉でした。

1974-2003年

昭和49-平成15年

街の復興に伴う 店舗の取り壊し

震災から1年ほど経つと、ようやく街の復興が始まりました。神戸市から、店舗の北側を走る山手幹線の拡幅工事の計画が発表されると、「二楽園」の敷地約520坪のうち約70坪がセットバックのために収用されることになり、本社ビルの建て替え計画が始まりました。その3年後には店舗の取り壊しが始まります。この時、車の出入りが多い造園事業部は岡本での営業が難しいと判断し、芦屋市に収用地の代替地として200坪の土地を取得し、移転が決まりました。小売店舗は山手幹線の北側のビルの1階と近くを流れる天井川の西に仮店舗を構えます。併せて仮事務所や従業員の休憩室等も借り、この年は大きな赤字となりますが、お客さまが離れてしまうことを考慮し、商売を続けました。



震災から3年目となる1998(平成10)年の新年会。震災前までは毎年ホテルで行われていた新年会も、この年は仮事務所で行われました。まだ先が見えない状況のなか、出ていく経費をとにかく抑え、手堅く進む方針が従業員に伝えられました。

阪神事業本部(二楽園グリーンステージ)設立

造園事業部は1998(平成10)年10月10日に新たに設立された「二楽園綜合園芸株式会社阪神事業本部(二楽園グリーンステージ)」として、本社社屋より一足先に完成した芦屋の社屋で新たなスタートを切ります。※現在の名称は「株式会社二楽園造園事業部」。

1階に店舗、2階が温室と事務所、3階には会長室・会議室を構えるつくりで、計画当初はもう少し小規模な建物を予定していましたが、惟之の「造園事業部のきちんとした基地となる建物を」という思いをもとに、造園業で使われるトラックも出入りできる3mの背の高いガレージも併設された本格的な社屋で



の「総合造園部」「環境緑化部」「景観園芸部」から構成される造園事業部として新たなスタートを切りました。

造園事業とガーデニング関連用品の小売りでスタートした「二楽園グリーンステージ」の1階店舗は、前年の1997(平成9)年頃のガーデニングブームもあり、大変好調なスタートとなります。当時は「花屋=切花」が主流でしたが、「二楽園グリーンステージ」では切花ではなく、花苗とガーデニング用品の扱いをメインとしました。造園事業の会社による「直売」というスタイルを活かし、花苗や観葉植物、用土や作業用具、大型商品まで広く扱う店頭は、ガーデニング好きのお客さままでにぎわい、その頃はまた珍しかったガレージセールなども好評となりました。その後、南側にあった駐車場がなくなってしまい、お客さまの駐車場の確保が難しくなり、残念ながら小売店舗は営業を中止しました。

2階の温室では主にリース用観葉植物の養生を行います。厳密な温度管理が可能で、冬場の葉の傷みなどにも対応できる温室には、リース先から引き上げてきた植物をガレージからそのまま貨物エレベーターで移動させられ、植物の養生・栽培がスムーズで効率的にできる構造になっています。



震災復興と共に変化した造園事業

造園事業部では、震災前は公園づくりや管理、街路樹の剪定なども多く手掛けており、神戸市の街づくりも活気がありました。しかし、震災後は瓦礫の撤去など土



木関係の仕事も多くこなし、神戸の復興に直結する仕事が増加しました。

復興工事が落ち着くと、再び公園をつくる仕事が増えます。震災以降は憩いの場としてだけでなく、防火水槽となる水瓶を地下に埋め込んだり、簡易トイレを設置できる機能を持たせるなど、防災機能が付加された新しい公園づくりが増加していきます。神戸市の災害復旧工事の一端を担うこととなったこれらの工事は、基礎の土木業務から植栽まで全ての工程をトータルに自社で請け負うことができる「二楽園」の強みが活かした事案となり、これらの工事は震災発生後10年近く続きました。

住宅やマンションのニーズも増加

「二楽園グリーンステージ」が設立された1998（平成10）年頃は震災の復興工事が進み、少しずつ街の景色も落ち着き始めており、個人宅の庭園工事が増え始めていました。「もう一度庭をきれいにしたい」「今度は西洋風の庭にしたい」という要望が増えていきます。また、マンションの建て直しも進み、マンション周りの植栽や、エントランス付近に樹木を植えるというニーズも増えるとともに、エントランスに花を飾る要望も増え、そこからマンション住人の方々からの花や観葉植物の室内装飾の依頼が入るというように、仕事の幅が広がっていきました。この頃は神戸だけでなく大阪方面からも依頼が増え、阪神間へと地域的な広がりも見られました。

—「二楽園グリーンステージ」—

地鎮祭

二楽園グリーンステージ建設工事に先がけ、1998（平成10）年1月18日に地鎮祭が行われました。



社屋完成披露会

1998（平成10）年9月21日に新社屋披露会を行いました。立食パーティスタイルの会場では、おでんや蕎麦のケータリングも提供しました。



【「二楽園」の造園事業】

1950（昭和25）年に造園部として開設された造園事業部は、「二楽園」ならではの特長を強みに成長してきました。惟之は造園部開設前から、工事だけではなくデザインや企画のできる専門家を集めて造園・土木の仕事をごなしており、当時から全国的に技術の高さに定評があった神戸の造園業のなかでも老舗の1社になっていました。

開設当時は個人宅の庭園づくりが中心でしたが、庭園といえば灯籠と松の木というような日本庭園が多いなか「二楽園」は、花の取り扱いがあったことを活かし、洋風の庭づくりをいち早く取り入れて、他社にはない提案力・企画力で成長します。

1977（昭和52）年、神戸ポートアイランド博覧会（ポートピア'81）



英国王立園芸協会監修「新しい日本の庭」

開催にあたり、神戸市からの造園関連の依頼を業界として対応することを目的に「神戸市造園協会」が設立され、「二楽園」も参加します。これ以降神戸ポートアイランド博覧会の会場の緑化はもちろん、公園整備事業なども手掛けるようになりました。

また、2000（平成12）年に開催された「淡路花博」では、「英国王立園芸協会（RHS）」からのご指名により、最終イベントを飾るテーマガーデンとして、同協会監修による

「新しい日本の庭」を造園。本場のイングリッシュガーデンをベースに、日本独自の植物をミキシングした新しいスタイルの庭園は、花博のフィナーレを飾るにふさわしい斬新なガーデンシーンとして、多くの来場者の目を奪いました。

1974-2003年

昭和49-平成15年

新社屋ビル「ガーデンライフ岡本」完成

阪神・淡路大震災の影響から、「二楽園」の北側を走る山手幹線の拡幅計画により建て替えとなった社屋跡地に、2000（平成12）年10月、新社屋となる地上14階建ての「ガーデンライフ岡本」が完成しました。4階から14階は「人々の暮らしと生活環境に花と緑で『美』を創造する」をテーマとした住居フロアに、1階から3階までは「二楽園」の事務所と店舗を中心にカフェや雑貨店、化粧品店、ファーストフード店、イングリッシュスクールなどの商業施設が集積。「二楽園」らしい花と緑があふれる駅前ビルとして新しい岡本の顔となり地元の皆さまからも好評をいただいております。こうした地元への貢献を評価され、2001（平成13）年には、住宅金融公庫より「KANSAI優良団地賞」に選ばれました。さらに、1,000万ドルの夜景とうたわれる神戸市で、夜景の美しいスポットを100カ所選定する「光の百選」にも選ばれています。



「二楽園」では古くから摂津本山駅の駅前花壇に花を植えて、その管理もしており、1986（昭和61）年には摂津本山駅開業50周年にあたり、日本国有鉄道（現在のJR）より感謝状をいただきました。このご縁で現在の社屋建設の際に、摂津本山駅側から駐車場へスムーズにつながる設計が実現しました。



【社屋の歴史】

神戸大空襲で瓦礫と化した敷地を整地し、1948（昭和23）年に間口3間の店舗で再スタートした「二楽園」の社屋は、2000（平成12）年10月には14階建ての駅前ビルへと生まれ変わりました。

1953（昭和28）年

1963（昭和38）年

1983（昭和58）年

～1995（平成7）年



左側の日本語看板の家屋が1948（昭和23）年に建てられた最初の小売店舗。5年後に右側部分が拡張されました。



1963（昭和38）年に建設された店舗・社屋。



1983（昭和58）年に建てられた店舗・社屋。右側部分にガーデニング売場が拡張されました。



阪神・淡路大震災まで長らく親しまれた岡本本店と社屋。

阪急岡本駅の駅ジャック広告

2000（平成12）年10月1日の新店舗オープンに合わせ、阪急岡本駅では9月28日～10月4日まで駅内全てのポスター掲示スペースを借り切った「駅ジャック広告」を展開。「二楽園」を象

徴する真っ赤なバラのポスターがホームや通路など駅全体を華やかにジャックし、注目を集めました。



オープニングのチラシ広告。

オープニングセール当日は、開店前からご来店いただいた多くのお客さまの行列が二重三重と続き、摂津本山駅前に明るさが戻りました。



鉢花や観葉植物のほか、テラコッタの鉢やアンティーク調の鉢などが並ぶ2階のガーデンプロムナード。



本社社屋竣工式典

新店舗のオープンに先立ち、2000（平成12）年9月30日に本社社屋竣工式典を行いました。お世話になった地域の方々をはじめ、当時の衆議

院議員、兵庫県会議員、神戸市会議員の方など多くの方々が駆けつけてくださいました。



幹部社員左から、弁護士 田邊昌良、代表取締役社長 奥谷信秀、取締役会長 奥谷惟之、専務取締役 林悦久、取締役顧問 林泰仁 ※役職はオープン当時



ご来賓の皆さまのお出迎え風景



受付風景



取締役会長 奥谷惟之の挨拶



代表取締役社長 奥谷信秀の挨拶



会場風景



演奏者を招いての生演奏



ご来賓の皆さまのお見送り

【創業80周年記念モニュメント】

「二楽園」の創業当時、武庫郡本山村岡本と呼ばれていたこの一帯は「梅は岡本、桜は吉野」と称され、江戸時代から梅の名所として知られていました。また、水上勉の小説「櫻守」のモデルとなった桜博士・笹部新太郎氏の邸宅があった街としても知られ、邸宅跡は現在「桜守公園」として市民に親しまれています。

この古くから多くの花の名所が存在する美しい街・岡本のアイデンティティを広くアピールし、街の活性化の一助となるようにと、2003（平成15）年に創業80周年を記念したモニュメントを、店舗1階の西側に建立しました。「笹部桜の園岡本、梅林の里岡本」をテーマに、世界的な彫刻家・流政之氏に創作をお願いし、快諾を得て制作されたこのモニュメントは創業以来、当地で生まれご愛顧いただいた「二楽園」の感謝の形でもあります。

ながれ まさゆき
流政之氏

1923(大正12)年ー2018(平成30)年、長崎県生まれ。彫刻家として活躍するかたわら庭園の作品でも名を残す。1975(昭和50)年ニューヨークのワールド・トレードセンターのシンボル「雲の砦」をつくり国際的評価を得る。日本建築学会賞、日本芸術大賞、中原梯二郎賞、吉田五十八賞など受賞歴多数。



2004-2023年

平成16-令和5年

第4章

発想の転換でもう

大正12年	「二楽園」設立
大正12年	関東大震災
昭和11年	2.26事件
昭和16年	奥谷惟之が二代目園主として「二楽園」を引き継ぐ
昭和16年	太平洋戦争始まる
昭和20年	神戸大空襲で、大温室が大破
昭和20年	天皇、「終戦の詔書」を放送(玉音放送)
昭和21年	小売業スタート
昭和21年	日本国憲法公布
昭和23年	二楽園種苗園芸株式会社を設立
昭和23年	奥谷惟之が取締役社長に就任
昭和25年	造園部と貸鉢部を開設
昭和26年	サンフランシスコ平和条約調印
昭和34年	社名を二楽園綜合園芸株式会社に改称
昭和39年	東京オリンピック1964開催
昭和47年	沖縄返還
昭和55年	芦屋店・ハフィオ DE ニラク オープン
平成元年	消費税開始(3%)
平成3年	六甲アイランド店オープン
平成9年	神戸ファッションプラザ店オープン
平成9年	消費税5%に
平成10年	阪神事業本部を開設
平成10年	二楽園グリーンステージオープン
平成10年	奥谷惟之が取締役会長に、 奥谷信秀が代表取締役就任
平成12年	本社ビル竣工、本店もリニューアルオープン
平成14年	神戸ファッションプラザ・ニラクエンオープン
平成21年	西神中央店オープン
平成24年	ニラクエン北神戸店オープン
平成24年	甲南山手店オープン
平成25年	社名を株式会社二楽園に改称
平成26年	消費税8%に
平成29年	北神戸basicオープン イオンモール伊丹昆陽店オープン
平成31年	NIRAKUEN basicオープン
令和元年	消費税10%に
令和2年	第1回新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言
令和5年	創業100周年

代表取締役社長に奥谷信秀が就任

1998(平成10)年、奥谷惟之が取締役会長に、奥谷信秀が代表取締役社長に就任しました。三代目となる信秀は、創業の大正12年から受け継がれる「二楽園」の歴史と伝統を活かしながら、百貨店勤務で培ったノウハウも導入し「新しいことをしたい」と考えていました。



三代目 奥谷信秀

その一つとして、ホテルや百貨店のような上質な接客を目指し、従業員の言葉遣いや服装についても見直しを図ります。「二楽園」に来てくれたお客さまに上質な時間も一緒に提供したいと考えたのです。制服基準をつくり、言葉遣いはもちろん同時に専門的な知識で販売レベルも上げたいと考え、従業員はアルバイトではなく正社員としての採用にしました。

また、当時は当たり前だった母の日フェア準備の残業も見直しました。当然のように変わっていた日付が変わるまでの残業に小さな違和感を覚え、残業は電車で帰宅できる23時までとしました。従業員から「難しいのではないかな?」という声もありましたが、見直し後も売上が落ちることはなく、やり方が大切だと痛感します。こうして、一方的な変化を求めめるのではなく従業員にもきちんと理解してもらい、ともに成長できる改革を実施しました。

「花の福袋」

その後もさまざまな新しいスタイルが導入され、今も歳末の風物詩として岡本の街で親しまれている「花の福袋」もその一つでした。発売当初は10種類の花や緑がセットで2,000円～2,500円というサービス価格で提供し、400個限定で販売される

と毎年またたく間に完売となる人気商品となりました。

その当時、福袋といえば百貨店などでは毎年ニュースになるほどの争奪戦になるのに、花の小売店での福袋はあまり売れていませんでした。信秀はその頃の福袋の定番で



一つ上を目指す

あった球根や肥料などでは売れないと判断。福袋に鉢花も入れることを考えました。鉢花を入れてどうやって袋に入れるかを考えるうちに、福袋の中身を見せて販売することを思い付きます。当時は珍しかった中身の見える福袋のいち早い導入に周りは驚きますが、結果としては飛ぶように売れて同業他社の多くが同様の販売を始め、花の小売店での福袋の定番スタイルになりました。

発想の転換「花とインテリア」

花の小売の現場では、母の日がある5月と新年用のニーズが上がる年末は忙しい反面、特に夏場と年明けに売上が落ちていました。百貨店をはじめ、多くの小売業がこの夏場と年明けにはセールで集客できているのに、花の小売業ではセールは存在しなかったのです。

その当時、神戸では阪神・淡路大震災からの復興が進み、造園事業・小売事業ともに業績が伸びていきます。街が作り直され、新しい商業施設が次々にオープンし、家具やインテリアの売れ行きも伸びるなか、信秀は観葉植物のインテリアとしてのニーズが高いことに気づきます。インテリアは復興に合わせたニーズが上がっている上に、夏場と年明けのセールにも対応できると考えました。

インテリアとしての観葉植物を探しに来られるお客さまの、ほかのインテリアニーズも一緒に取り込もうと、絵や照明などさまざまなインテリア雑貨の取り扱いが増えていきます。お店の天井が空いているのでシャンデリアも置いてみることにしました。シャンデリアはもちろん、それまで扱いのなかったインテリアを



販売することに周囲は驚きますが、商品は好調な売れ行きとなり、結果的にインテリア販売の売上はどんどん伸びていき、「この時期は売れない」ではなく、発想の転換で売上は作ることができると確信しました。

800坪の売り場を展開する「花屋」へ

2002（平成14）年になると、新店舗「神戸ファッションプラザ・ニラクエン」をオープンします。震災からの復興が進み、人々が「部屋を飾る」ことを始めたと考え、800坪を使った売り場で花とインテリア・家具の販売を展開します。当時は花の小売店がこれだけの幅広い商品を取り扱うことはほとんどなく、珍しい取り組みとして注目も集めました。

パリのインテリア雑貨や、アンティーク調のランプや家具、ステンドグラスなども扱い「二楽園」ならではのこだわりの商品が人気となります。また、輸入した大きな1点ものの壺を木枠に入れたまま展示するなど、売り場作りでも「新しさ」は注目を集め、この店舗の出店を皮切りに「二楽園」では出店を拡大していきます。



▲注目を集めた、木枠に入れたまま展示された壺

【「新しい」店頭イベント】



さまざまな「新しいこと」を取り入れていった「二楽園」では店頭でも、お客さまが花をもっと楽しんでいただける色々なイベントを行いました。中でも人気となったのはオークションイベントで、胡蝶蘭などの花鉢を展示してお客さまに入札してもらい、最も高い価格で入札された方にご購入いただきました。結果としては毎回格安の販売になってしまいましたが、お客さまに楽しんでいただけるイベントとしてご好評をいただきました。





「二楽園」店舗拡大の歴史

1980(昭和55)年 芦屋店・パフィオDEニラク(芦屋市船戸町/JR芦屋駅)

1991(平成3)年 六甲アイランド店(神戸市東灘区向洋町)

1997(平成9)年 神戸ファッションプラザ店(神戸市東灘区向洋町)

1998(平成10)年 二楽園グリーンステージ
(芦屋市打出小植町)



2002(平成14)年 神戸ファッションプラザ・ニラクエン(神戸市東灘区向洋町)



2009(平成21)年 西神中央店(神戸市西区梶台)

2012(平成24)年 ニラクエン北神戸店(神戸市北区藤原台中町)

2012(平成24)年 甲南山手店(神戸市東灘区森南町)

2017(平成29)年 北神戸basic(神戸市北区藤原台中町)

2017(平成29)年 イオンモール伊丹昆陽店
(伊丹市池尻)



2019(平成31)年 NIRAKUEN basic
(神戸市北区藤原台中町)



大型フェアの開催

神戸ファッションプラザ・ニラクエンの出店から間もなくして、店舗が入る神戸ファッションプラザ内のイベントスペース「アトリウム・サン広場」でのフェア開催の依頼が入ります。アトリウム・サン広場は700坪の広大なスペースでしたが、花や観



会場へのゲートは毎回色を変え、神戸ファッションプラザが制作してくれました。



葉植物、ガーデンファニチャーからインテリアまでさまざまな商品が並び、大変な賑わいとなります。

フェアは好評となりその後、何度も開催されることになりました。その集客力からさまざまな支援もいただきました。設営から搬入までを2~3日で終えて約1ヶ月間の開催、その後撤収と大掛かりな作業が続きますが、設営や搬入等は仕入れ業者も手伝ってくれました。また神戸ファッションプラザもチラシや会場の大型POPを制作してくれるなど積極的に応援していただきました。NIRAKUENのロゴもこの時に会場アーチのPOP用にと制作していただいたものです。

この当時、花の小売店ではほとんど見かけなかった「ぬいぐるみ」を3,000個仕入れ、従業員に驚かれながらも、あっという間の完売となるなど、今までの常識にはとらわれない新しい発想を展開させていきます。

花の講習会イベント

インテリアの取り扱いを始めると、他方面から新しい商品の売り込みが入るようになり、商売の幅もどんどん広がっていきま



した。当時店舗が入っていた縁でご依頼いただいたJR芦屋駅のショッピングモール「モンテメール」での展示会や講習会のイベントも、「新しいことをやっている二楽園なら」がきっかけで声をかけていただきました。

この頃人気となりつつあったプリザーブドフラワーの展示会とアレンジメント講習会のイベントをはじめ、専門家によるバラの育て方講習会や、ガーデニング講習会、切り花アレンジメントや寄せ植え講習会など、さまざまなイベントを行いました。



2006(平成18)年プリザーブドフラワーのアレンジメント講習会では併設で展示会も行いました。



講習会と同時開催となったプリザーブドフラワーの展示会では、芸術性の高いラグジュアリーな作品を一堂に展示。この頃にプリザーブドフラワーの人気が高まりつつあったこともあり、注目度も高く多くの方に足を運んでいただきました。

—藤岡先生による寄せ植え講習—



伊丹バラ園営業部長を経て、園芸コンサルタントとして関西地方を中心にバラ園の企画計画・管理まで手がけるバラのプロとして大活躍され、NHK「趣味の園芸」指定講師も務めた藤岡友宏先生による、バラの植え方・育て方講習会や寄せ植え講習会も人気のイベントでした。

藤岡先生は学生時代に「二楽園」岡本店でアルバイトをしていただいていたのが縁となり、造園事業部でのバラの育成講習会などでも長年お世話になっていました。

【バラのバス広告】



2011(平成23)年からは、新しいお客さまへの認知度アップを目的に、神戸市内の灘から芦屋付近を走る路線のバスの車体広告を開始。「二楽園」の代名詞ともいえるバラがよく目立つ広告は、来店されたお客さまから「見たよ」とお声がけいただくこともあります。また、古くからギフトに強い「二楽園」は、その包装紙や手提げ袋が「高い品質の商品」として認識されており、なじみのお客さまへの「思い出し広告」の役割も果たしています。



京都・宮城での講演依頼

花の小売りにインテリア販売を取り入れて売上を大幅に伸ばし、出店の拡大を続ける「二楽園」の代表取締役社長として、信秀には講演の依頼も入ります。

2002（平成14）年には京都府園芸商組合から、総会議の場での講演依頼があり、「もうひとつ上を目指すために」として、伝統を守りながら新しいことを取り入れていった経営方針や今後のビジョンなどについて語りました。また、3年後の2005（平成17）年には京都府園芸商組合から、再度の依頼があり「発想の転換 やる気で勝ち残る」として2002（平成14）年の講演内容の検証・振り返り講演として語りました。

また2011（平成23）年11月には東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県のみやぎ仙台商工会主催の「震災復興セミナー・懇親交流会」での講演も依頼され、みやぎ仙台商工会所属の同業者さんが縁で招かれた講演となりました。当日のリーフレットには「その会社は震災から不死鳥のように蘇った!」と赤く目立つ文字で書かれており、震災からの復興を模索する仙台の皆さまの大きな期待を感じつつ64名の参加者を前に「阪神・淡路からのメッセージ 社員と地域に生かされた」のタイトルで講演を行いました。震災発生から僅か8ヶ月後の講演で、講演料は講演内容とともに復興に役立てていただきたいと願い出て帰路につきます。

コロナ禍を経て迎える100周年

世界的なパンデミックとなった新型コロナウイルス感染症



は、日本では2020（令和2）年の4月に政府から1回目の緊急事態宣言が発表され、街中が閑散としました。その後約3年もの間、生活にさまざまな制限が設けられましたが、2023（令和5）年5月に第5類へと移行されると、政府から自粛要請が出ていたイベントやセールも徐々に開催されるようになり、街にも人が増え始めました。

2023（令和5）年に創業100周年を迎える「二楽園」でも、100周年セールと店頭での「100本のバラ」イベントを実施。「二楽園」の代名詞であるバラを100本の花束にし、花のアーチで作ったフォトスポットをご用意してお客さまに写真を撮っていただき、ご夫婦で記念撮影される方や、大きな花束の重さに驚く方など笑顔にあふれるイベントとなりました。

造園事業部での新たな取り組み

震災からの復興が本格的になり、造園事業部もさらなる総合力の必要性が高まりますが、その頃の造園事業部はマネジメントをする者が不在となっており、当代表取締役役に就任した信秀と同じ百貨店業界で働いていた奥谷雅博（現在の常務）に白羽の矢が刺さります。当時は個人が各々仕事をこなしており、受注から完成までの期間が長く、売上の実態が掴みにくい状態でした。そこで、常務は新たな取り組みとして造園事業部の売上の見える化を図り、見えてきた売上実態からより大きな工事を受注する方法を模索します。当時、神戸市の工事請負会社はランク分けされており「二楽園」は大型工事が受注できないBランクであったことから、対策は請負金額を上げ、技術者の「1級造園施工管理技士」の数を増やすことだと考え、常務は自ら資格取得のための学校に通い、同時に週2回、自らが講師となり従業員に勉強会を開き資格取得者を増やします。

その後1級造園施工管理技士が増え、工事請負のランクもAに上がり大型工事を受注できるようになると同時に、当時は少なかったCADが使える会社として民間受注を増やします。受注の増加に併せて若い人材を増やし、仕事も任せていきました。



常務 奥谷雅博

時代背景に合わせた柔軟な変化

2005（平成17）年頃からは、すでに加入していた神戸市造園協会の関係で、造園事業部では都市公園の管理業務も増加していき、神戸市立須磨離宮公園や神戸市立相楽園などの公園の運営管理でも、神戸市造園協会として参入します。この協会では神戸市と防災協定を結んで、安心安全の提供による社会貢献体制もつくりました。

その後リーマンショックやデフレの影響もあり、公共管理作業の価格競争が激しくなり、造園事業部では民間の植栽管理強化へとさらにシフトチェンジしていきます。また、神戸市の花壇のコンペ案件の強化も図り、CAD以外にもグラフィックソフトのIllustratorやPhotoshopが使える技術者を採用。企画力とより具体的な提案書の作成を武器に、さらにコンペの勝率を上げていき、神戸市や造園業界からも一目置かれる「二楽園」となっていきます。

「二楽園」の成長には「人」の成長が深く関わっています。例えば、企画面で強くなりコンペ案件で高い勝率となったのも「人＝従業員」が切磋琢磨しながら成長したことが大きく影響しています。なかには「二楽園」を離れた従業員もいますが、新たなステージでの交流や仕事上でのコラボなど新しいつながりも増え続けています。



大きな石を使った石組みによるダイナミックな枯山水。神戸千歳公園2004（平成16）年。

クレームから得たビジネスチャンス

またこの頃、あるクライアントで仕事の履行不履行のチェックミスのクレームが発生します。造園事業部ではその改善を得意先と一緒に何度もやり直ししながら、改善策となる書式フォーマットを一から作成。時間と根気を要する作業でしたが、クレームへの改善策に真摯に取り組んだ結果、高い信頼を得る一つのモデルケースとなり他社からの引き合いが増え、六甲アイランドの造園作業の半分近くを「二楽園」1社で受注できたのも、クレームから生まれたこの改善策が評価された結果となりました。



現在も使われている改善策となった書式フォーマット

ムへの改善策に真摯に取り組んだ結果、高い信頼を得る一つのモデルケースとなり他社からの引き合い

が増え、六甲アイランドの造園作業の半分近くを「二楽園」1社で受注できたのも、クレームから生まれたこの改善策が評価された結果となりました。

造園事業部における次の100年への課題

2018（平成30）年頃になると社内の高齢化が進み、退職者が増え、募集をかけても人材が集まらず依頼があるのに受注できない仕事が増えていきます。またこの頃から中小規模の設計案件の縮小傾向が見られ、高効率の仕事に絞って舵を切っていくことになりました。その後コロナ禍の序盤では仕事量が減少しますが取捨選択の末残った業務により、コロナ禍でもさらに採算性が高まりました。造園業界全体が高齢化で需要と供給のバランスがとれない状況にあり、「二楽園」でもニーズの全てを受注できていませんが、結果として仕事は忙しい状態が続いています。

今後は深刻化する後継者不足が課題となるため、新人社員だけでなく中途採用も強化し、他の業界で仕事をしてきた人の新しい視点、新しい発想も取り入れて、他社との差別化を図っていくことを、次の100年への課題として取り組んでいます。

—イベント「にわのあかり」—

近年は公園等でのイベント用オブジェの制作も行っています。花や植物がメインではなく、人を集めるためのオブジェとして、2019（平成31）年の神戸市



相楽園でのイベント「にわのあかり」では竹に無数の穴を空け、神戸の風景を表現。並んだ竹に浮かび上がる幻想的な光はSNS等でも多く取り上げられています。

【中国・天津市でのプランター飾花現地指導】

北京オリンピックを前に中国・天津市の訪日団が来神した際、フラワーロードのプランター飾花に注目。北京オリンピックに向けて飾花の指導・協力の要請を受け2009（平成21）年、神戸市造園協会の1社として現地指導を実施。高低差をつけた寄せ植え技術等を20日間にわたり伝えました。



第5章

「二楽園」の人々

お客さまのために、花と緑のために、100年の道のりをともに歩んできた「二楽園」の人々。



1953(昭和28)年

創立30周年パーティにて。

左から2番目は当時「二楽園」岡本店でアルバイトとして勤務していた、後のNHK「趣味の園芸」指定講師の藤岡友宏先生。



1955(昭和30)年1月7日

神戸旧居留地の第一樓での新年の宴会。



1956(昭和31)年8月

比叡山から近江舞子への社員旅行での一枚。



1958(昭和33)年
会社にて。

1958(昭和33)年4月1日
創立35周年の記念写真。



1958(昭和33)年
創立35周年の社員旅行にて。



1965(昭和40)年7月21日
長野県松本市への社員旅行で立ち寄った美鈴湖にて。
このほか美ヶ原うつくしがほらなどにも立ち寄りました。



1966(昭和41)年7月18日
広島宮島の宮島(廿日市市)への社員旅行での記念写真。



1968(昭和43)年
45周年の記念に法隆寺(奈良県生駒郡)の塔前にて、
従業員全員での記念写真。



1985(昭和60)年8月14日
社員旅行にて。淡路島から徳島市の
阿波踊り見物を楽しみました。



1970(昭和45)年4月
芦屋会館(当時)での
創立47周年記念祭にて。



1990(平成2)年6月11日
ホテル竹園芦屋で行われた
奥谷惟之黄綬褒章受章祝賀会にて。



1991(平成3)年6月18日
六甲アイランド店オープン記念の
集合写真。



1992(平成4)年8月5日
社員旅行での記念写真。



1996(平成8)年6月18日
第73回創立記念。阪神・淡路大震災から1年半、
復興の歩みの中での周年記念となりました。



2006(平成18)年5月24日
第83回創立記念。
神戸ベイシェラトンホテル
& タワーズにて
記念パーティを行いました。

2013(平成25)年4月12日
第90回創立記念。



2008(平成20)年5月20日
神戸ベイシェラトンホテル&タワーズでの
第85回創立記念パーティにて。



左から前列
取締役顧問 林泰仁
専務取締役 林悦久
取締役会長 奥谷惟之
代表取締役社長 奥谷信秀
取締役副会長 松本良三
常務取締役 奥谷雅博
後列
監査役 松本清子
取締役 奥谷知子
西尾俊司(前取締役)
堀尾俊雄(前取締役)

「二楽園」の花と緑の軌跡

阪神間に花と緑を広げた「二楽園」直売部の店舗と造園事業部の施工実績。

直売部



岡本本店
2000(平成12)年に新社屋ビル1・2階にオープンした岡本本店。1階は生花と鉢花、2階はグリーンとインテリア、2階屋外のガーデンプロムナードではガーデニング資材を中心に展開しています。



岡本本店
メインフロア/
1983(昭和58)年頃
年末恒例のシクラメンセールには、花色も大きさも豊富なシクラメンが並び、圧巻の品揃えでメインフロアが華やぎました。



岡本本店
ガーデニング
売り場/
1983(昭和58)年頃
この頃に拡張されたガーデニング売り場は「花の散歩みちのあるフラワーショップ」として人気を博しました。



芦屋店・
パフィオDEニラク
JR芦屋駅、大丸芦屋店に隣接した支店第1号店。店名は洋ランのパフィオベディラムから命名しました。1980(昭和55)年オープン。



六甲
アイランド店
国際色豊かな街、六甲アイランドでの初出店の店舗は1991(平成3)年イーストコート5番街にオープンしました。



神戸ファッション
プラザ店
六甲アイランドの中心部神戸ファッションプラザにある、上品なブティック風ショップ。1997(平成9)年にオープンしました。



二楽園
グリーンステージ
花苗とガーデニング用品を中心に、生花や鉢花などバリエーション豊富なショップとして親しまれました。1998(平成10)年オープン。



神戸ファッション
プラザ・ニラクエン
観葉植物とインテリア商品を中心に、生活の中のグリーンを提案する新しいスタイルの売場として2002(平成14)年にオープン、その後800坪まで拡張しました。



西神中央店
神戸市中心街から地下鉄で30分足らずのベッドタウン「西神中央地区」で、やや独立した商圏を持つエリアのショッピングセンターに2009(平成21)年出店。

ニラクエン
北神戸店
アートフラワーやステンドグラスから輸入家具まで幅広い商品を扱う店舗として、2012(平成24)年にオープンしました。



甲南山手店
本格的な家具やステンドグラス、シャンデリアなども扱う、インテリアとグリーンの生活提案型ショップとして2012(平成24)年にオープン。



北神戸basic
エコー・リラショッピングセンター内に2017(平成29)年オープン。



イオンモール
伊丹昆陽店
切花を中心に、スタイリッシュな観葉植物・雑貨類も展開。ショッピングセンターのイオンモール内に2017(平成29)年にオープンしました。



NIRAKUEN basic
ふらりと立ち寄ってお花を買い求める「気軽な花屋さん」をモットーに、2019(平成31)年オープン。

造園事業部



ふしぎの国のアリスの庭 (神戸ファッションプラザ)
 童話「不思議の国のアリス」をテーマに神戸六甲アイランドの神戸ファッションプラザ内アトリウム・サン広場に童話のお城と庭を施工。イベントを盛り上げました。1998(平成10)年。



神戸六甲アイランドマリンパーク



神戸市立フルーツフラワーパーク



侘びの茶室 (個人邸)
 侘び寂びを取り入れた本格的な和風庭園も設計から施工まで実施。



「しあわせの村」花づつかがみ花壇



相楽園 にわのあかり 2017
 正門入口にアイキヤッチ・フォトスポットとなる帆船をつくりました。



相楽園 にわのあかり 2022
 稲妻のように光る雲を従えた風神雷神で、相楽園の庭園を彩りました。



塩瀬中央公園内バラ園
 2021(令和3)年完成。



ひょうごまちなみガーデンショー
 明石駅コンコースにモニュメント花壇を設置しました。



神戸市花のフェスタの立体花壇
 当初は神戸市造園関連の書類に「二楽園方式」と掲載されるなど、造園業界における立体花壇の先駆けとなりました。



神戸国際会館 屋上庭園「そらガーデン」
 有名ガーデナー監修による「そらガーデン」は、シンボルツリーに樹齢500年を越すオリーブの大きな木が使われ、南半球や赤道直下の国々から持ち込まれた植物でつくられました。



バラの研修会
 NHK「趣味の園芸」指定講師も務めた藤岡友宏先生による研修会。



居留地 円形花壇



ホテルプラザ神戸 芝生管理



相楽園 菊花展 造園花壇



相楽園 松の手入れ風景



こうべ花時計
 神戸市役所の北側にある直径6mの花時計。年に数回の植え替えを実施しています。

「二楽園」を支えた功労者の方々



松本 良三(前副会長)

戦後間もない頃「二楽園」に就職し、空襲のために瓦礫と化した大温室の跡を整地しつつ、配給制度の野菜や花卉等を栽培し、二代目・惟之をサポートしながら復興を進めるなど「二楽園」の繁栄に努力を重ねていただきました。また、兵庫県造園園芸総合事業組合の理事も長く務めるなど、兵庫県の造園、園芸の業界の発展にも寄与されました。

温厚な人柄で無口でありながらもお客さまの要望に丁寧に応える姿勢で、絶大な信頼を得ていました。社内でも造園、小売りの部門を問わずあらゆる現場に顔を出してくれました。働く場の後ろには必ず松本副会長の姿があり、困った時にはさっと出て来て処理してくれるその存在に、社員はいつも安心して仕事できていました。

副会長に就任した後も
枠に収まることは好まず、

率先して動く姿は社内でも人望が厚く、言葉数は少ないけれど、いつも周りに人が集まっていました。職場内はもちろん、お客さまの間でも潤滑油のような役割でその場をまとめ、「二楽園」にとっては、いつも誠実な行動でその信頼を築いてくれた方でした。



二代目・惟之の「数字は経営の羅針盤。会計をしっかり構築したい」という考えから税理士であった林顧問を役員としてお招きしました。

当時、園芸店としては導入例がほぼなかったオフコン（オフィスコンピューター）を導入した際には、3年対比の売上管理、小売店舗の品群ごとの粗利や利益率などの把握、造園事業の案件ごとの利益率の管理など、手書き作業をよりスピーディに処理できるように業務の効率化を実施していただきました。

さらにシステムの全く異なる、小売事業の販売管理と造園事業の原価管理の二つの会計処理を合わせるソフトをソフトメーカーに制作依頼し、詳細の指示やその後の微調整を担当いただき、二つの事業において経営管理・財務管理に必要な情報がスピーディに掌握できるようになりました。

また、山手幹線拡幅による新社屋建設に関しても、借り入れから返済計画、金融機関との折衝、30年間のビルの償却計画など、資金計画を担当していただきました。

会社の販売管理、財務管理の基礎を固めたその功績は絶大で、いつも役員会に参加していただき、社長はじめ役員は、会計や財務に関する専門知識を深く学ぶことができました。



取締役顧問 林 泰仁



副会長の妻である松本さんには副会長とともに、長い間「二楽園」を支えていただきました。

視力の弱かった会長の目となり、手となり、会長が必要な情報を得るために、献身的に支えていただきました。

マネージャー業務以外にも、売場に顔を出して従業員の相談に乗ったり、時には新人社員の住居の手配を手伝うなど、社員からの信頼も厚く、また常に社員への気遣いも忘れない、その場を明るくする職場のお母さん的な存在でもありました。

現在も監査役として、会社に長く貢献していただいています。



監査役/マネージャー 松本 清子



西尾 俊司(前取締役)

1964(昭和39)年4月1日の入社以来、官公庁発注の造園土木工事の施工管理、並びに民間造園の設計・施工・施工管理に47年従事し、部下や関連下請業者に対しては卓越した技量で技術指導にあたっていただきました。

特に日本庭園の作庭にあたっては、伝統の技法と現代人の感覚とを調和させる作庭技法に優れた感覚を発揮するとともに、新素材を取り入れるなど新工法で庭の魅力を引き出す努力は、施工技能者として他の範となるものでした。

「技術は学ぶものではない、盗むもの」と強い向上心とともに仕事に取り組んでこられ、茶道や華道、陶芸など日本の伝統文化を学ぶなど勉強熱心で責任感も強く、「二楽園」の日本庭園に関して一時代を築いた人物です。

1979(昭和54)年の入社以来、インドアグリーンをはじめ装園事業の仕事に従事し、兵庫県インドアグリーン協会の理事としても長年活躍されました。

部下や同僚の意見は決して否定せず上手に取り入れるなど、個性を伸ばすのが上手で人望も厚く、一人ひとりの個性や性格をよくみて、それを仕事に活かして育てる人でした。

1980年代に、園芸でもなく造園でもない装飾する園芸として「二楽園」が掲げたコンセプトワード「装園」では、「いつか花で庭を飾る時代が来る」という確信を持って、現代でいうガーデニング的な発想をいち早く取り込み、内外に提唱し、新しい市場分野を切り開いてきました。今はすっかり定着した立体花壇なども当初は神戸市造園関連の設計書に「二楽園方式」と掲載されるなど、この「二楽園」の装園事業を築き育てた人物でもあり、装園事業においてそのマインドは現在もコンペなどで発揮する提案力に脈々と受け継がれています。



堀尾 俊雄(前取締役)

「二楽園」懐かしの風景

創業者の奥之助が家族とともに神戸市東灘区岡本に移り住み「二楽園」を創業した1923(大正12)年当時、岡本にはまだ摂津本山駅も開設しておらず、のどかな田園風景が広がっていました。

関西で最初の温室農園

私たちがこの岡本に住み始めたのは、1923(大正12)年のことでした。その当時はまだ、このあたりは田畑が広がるのどかな場所でした。

私たちは役場に行き、村長さまに芦屋と住吉の中間で良い場所がないかと相談させていただき「地域の発展になることなら」と現在のJR摂津本山駅北側の1,500坪の土地を農園として提供していただきました。

冬は温室でカーネーション、バラを、夏はトマト、メロンなどを作る、関西では最初の温室農園でした。

当時、電車は阪急電車しか通っておらず、買物もお風呂も現在の阪神青木駅近くまで1kmあまり歩いて行っていました。水も大きな井戸を掘り、タンクを作りました。当時は1km以上離れた住吉川からでもそのタンクが見えるという評判のものでした。

1935(昭和10)年に国鉄(日本国有鉄道、現在のJR)の摂津本山駅が請願駅として開設され、少しずつ開けていくかな、と思っていたところに戦争が始まり、終戦になるまでアメリカ軍の空襲から逃げることで費やしました。

私たちの農園も被害にあい、温室は鉄骨のみが残りました。1945(昭和20)年に終戦を迎え、また一からの出発となりました。その



当時の温室

後、1961(昭和36)年に山手幹線ができ、ようやくこのあたりも開けてまいりました。1986(昭和61)年頃には駅前の環境の良さで、兵庫県第2位とかで表彰されました。

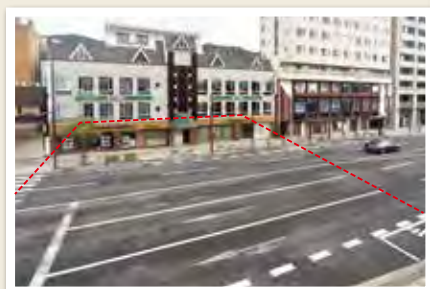
「創業者・奥之助の妻優文字の記憶から 1986(昭和61)年1月」



建て替え工事が進む「二楽園」
1962(昭和37)年頃。



1963(昭和38)年に
完成した新社屋。



創業当時は現在の社屋北側を走る山手幹線の4車線と向かいのビルまで「二楽園」の農地が広がり、花や野菜の栽培が行われていました。



1937(昭和12)年7月、請願駅として開設されて間もない摂津本山駅にて出征兵士のお見送り。



1963(昭和38)年当時の「二楽園」付近の様子。

昭和初期の「二楽園」社用便箋

昭和に入る頃から使われていた、NとRの「二楽園」のロゴマークが入った社用便箋。この頃の横書きは右から左へ読ませるものが多く「二楽園」の社名も住所も右から左へ書かれています。また、



兵庫縣武庫郡本山村岡本
(阪急電車岡本停留所南一丁)

電話御影八二〇番 振替大阪七五八〇八番

と表示されており当時は阪急電車などの駅も「停留所」と呼ばれていたことから、案内の表記も「阪急電車岡本停留所」となっていま

す。現在の請求書などに記載される振込口座は「振替大阪七五八〇八番」と記載されています。

「二楽園」の会社案内

1973 (昭和48) 年ごろに会社案内も制作していました。表紙面は「二楽園」を象徴するグリーン色の印刷で、裏表紙には写真のプリントが貼られています。



阪神大水害

1938 (昭和13) 年7月3日から7月5日にかけて、神戸市及び阪神地区で「阪神大水害」が発生。

「二楽園」も大きな被害を受けました。



「二楽園」の温室の前も水が押し寄せています。



当時の社屋・家の前は川と化しています。



現在のJR神戸線の摂津本山駅付近の被害状況。当時JRは「省線電車」と呼ばれており、この後日本国有鉄道となり、JRへと変わります。



水が押し寄せるJR摂津本山駅。

川のように水が流れる
神戸水道路。



甲南高等女学校北側の様子。線路がうねり、止まったままの電車の車体が見られます。

当時、甲南高等女学校北側の国鉄線(現在のJR)では急行電車が立ち往生し、乗客が甲南高等女学校の校内に避難、生徒や職員がこれを助けたとされます。この様子は当時の住吉村に住んでいた谷崎潤一郎の小説「細雪」にも詳述があります。

次の
100年に
つなぐ

クローズアップピープル

Close-up People

直売部



直売部 部長 板津 大助

ガーデニング用の小さな花苗からギフトに使われる数万円の胡蝶蘭まで「二楽園」本店で鉢花の仕入れを担当しています。

兵庫県屈指の高級住宅地といわれるエリアで100年もの間、私たちは商売をさせていただいています。お客さまは目も肥えており良い花を選ばれるので、生産地への視察でその年の花の出来を確認したり、市場での購入が難しい花や、技術力のある生産者が育てる花を仕入れるために、生産者の方々と常にコミュニケーションを図っています。また立場が変わると見え方も変わるので売場スタッフの声も大切に、スタッフが実際に感じた「売れた花」も大切なマーケティングと考え、それらを総合的に判断しています。

胡蝶蘭は年間を通して売上を作る花で当店では常に30~40点並んでいますが、ひな壇でこれだけ並ぶ店は珍しいと思います。お客さまのご要望も多く、価格帯も広く取り揃えており、お祝いやセレモニー、お供えなど大事な行事に使われるので品質は特に気をつけています。胡蝶蘭は大きく育てるのも小さく育てるのも難しく、リンの数や種類などの見極めも大切ですが、歴代の仕入れバイヤーが積み重ねたノウハウが「二楽園」の歴史として受け継がれ、常に良い品質のものを仕入れられています。

温暖化や物流業界の2024問題など遠隔地からの仕入れは課題が多く、生産者の方々はもちろん、市場や同業他社の方々とも連携して、今後も「二楽園」の品質の高さと品揃えを守っていきたくと考えています。



直売部 次長 高橋 俊介

「二楽園」本店で主に切花を扱った業務と切花の仕入れを担当しています。品質の高いものを求められるため、仕入れの際は花の質はもちろん日持ちなどの見極めにも気を使います。また他店にはないちょっと珍しいものも入れるなど、切花のプランも考えながら買い付けをしています。

切花はお客さまの好みをどこまでくみとれるかがポイントで、オーダー自体が「可愛く」「大人っぽく」とお客さまの主観で人によってイメージするものが違う、いわば正解のない仕事だと思えます。その反面、組み合わせの幅が広く柔軟性も高く、流行を取り入れたり、時代に合わせたお花のスタイルをご提案できるのも面白さだと思います。日々の接客でも、珍しい種類のものや、その日の仕入れで見つけた「今日の一番」の花などを組み合わせて「二楽園」ならではののお花のご提案を心掛けています。

花とインテリア・雑貨を販売する「二楽園」のスタイルに興味を持ち、暮らしの中で心を豊かにする、生活をちょっと楽しくするという考え方が面白いと思ったのが入社のかきかけでした。これからも花をメインにお客さまに楽しんでいただけるものも、従業員の喜びとともに提供していきたいと思っています。

そして、これから多様性が進む中で、いかに「二楽園」を選んでもらうかも考えていきたいです。そのためにも従業員全員がレベルアップを図りながら、よりスキルを上げてお客さまの信頼を勝ち取る。そんなお店にしていきたいと考えています。





経理・総務部



経理業務も総務業務もそれぞれ、作業ごとに期日厳守が大前提となるので、林専務のもと勤務形態の異なる3人のスタッフで、それぞれの勤務時間をやりくりして業務をこなしています。

経理業務では、小売事業と造園事業の二つの全く違う会計管理を行うので、FAXもまだ普及していない時期から、ソフト会社に依頼して独自の会計ソフトを制作して使用しています。現場の数字も経営管理上の数字も財務に直結するため、全ての数字を管理していますが、一元たりとも違わない厳格な管理が求められます。普段の業務では接点のない小売、造園それぞれの現場の協力無しでは立ち行きませんが、経理からは普段見えないそれぞれの現場も理解し、また現場も経理を理解してくれる、お互いの協力体制のもとに業務が成り立っています。

また総務業務でも人事や社会保険、雇用保険をはじめ各種保険手続きなど先送りを許されない業務を常に処理していく必要があります。そのためスタッフが、それぞれに負担がかからないように仕事の分担を考え、誰かが休んでもそれぞれが連携しながら、助け合いながら業務をこなしています。子育て、介護とライフステージの変化に応じた働き方を選び、部内でもしっかりとしたコミュニケーションをとりつつ、お互いが無理なく仕事と家庭を両立しながら働ける環境を実現できていると思います。

また、経理・総務部は普段はお客さまとの接点がありませんが、お客さま感謝セールで開催される店頭でのガラポン抽選会のお手伝いでは唯一お客さまと接する機会があり「良い商品が当たった!」「良い商品が安く買えた!」とお客さまと一緒に喜べるのも嬉し

い瞬間で、現場の空気を知る良い機会でもあると考えています。

創業100周年に当たり思い出すのは、やはり阪神・淡路大震災のことです。震災発生直後は自宅待機となり、会社の被災状況が大変不安でした。1週間の自宅待機期間のあとに出勤して全員の無事が確認できたこと、社屋が無事に残っていたことに安堵し、皆で喜んだことを覚えています。この時も経理・総務部では業務を止めることはできず、それぞれいつもと違う路線を乗り継ぎ、機能している交通機関を使って出勤しました。中には3時間かけて自転車で出勤した人もいました。

また、そんな状況の中「亡くなったお母さんに」と小さなお子さまがお小遣いを握りしめて花を買いに来てくれたのも印象深く残っています。会社はその時「必要な方に持って帰っていただく」とお子さまに花を差し上げ、店舗に残っていた花も近隣の必要な方々にお配りしました。震災後しばらくは先が見えず、会社として営業できるか不安な日々も続きましたが、震災から5年経った2000(平成12)年に新社屋が完成し、「二楽園」本店のオープニングセールにこぎつけることができました。阪急電鉄岡本駅の駅ジャック広告は、このオープニングセールを告知するポスターで埋め尽くされ、圧巻だったことを今も鮮明に覚えています。

今後はさらに仕事と家庭をより両立しやすくし、スキルを重ねた人が長く勤務できる、より働きやすい職場環境づくりを皆で協力しながら目指していきたいと考えています。



左から、
田附 もえ、
中西 幸美、
田中 友理絵、
専務 林 悦久

造園事業部



景観園芸部 部長 弘重 晴康

イベント装飾や花壇管理、リース業務などを行う部署で主に新規対応と全体の管理・サポートなどを担当しています。

毎年3月にコンペがあり、その結果で1年の仕事が決まるので2月からプレゼン準備に追われ、3月のプレゼン本番は年間を通しての一大イベントとなります。花をどう飾るかを考えながら、母の日など季節のイベントをどう見せるかがポイントで、新しい見せ方や表現を入れるために普段からアンテナを張って情報収集しています。毎日の仕事から次の年のコンペに活かせるアイデアがうまれることもあり、日々の業務が来年の仕事に繋がることも意識しています。

コンペでの獲得はもちろん、取れた案件を1年間丁寧に飾ることを大切に、また花や植物の見え方は年によって変わるので、誰がいつ見てもきれいに見えることを考えながら仕事をしています。



景観園芸部 次長 坂上 知之

もともと草花が好きで「二楽園」に入社し、植木や草花の管理を担当した後、北山植物園の担当になり30年近くになります。

ずっと同じところを担当するのは、ある意味では楽ですが、責任もあり手が抜けません。特に夏場は植物がしおれてしまうので、お盆の時期でも隔日です出勤します。長い休みがなかなか取れず、好きな草花を仕事にした大変さを感じることもあります。

年に何度かの植え替え時期には一度に1,000株も植え替えることもあり忙しくなります。土壌改良をしっかりと、その場所に合った植物を植えるのが大切で、合わない植物を植えると枯れてしまったり、水やりが大変だったりするので、見極めが重要になります。

近年の人手不足は深刻ですが、草花が好きで始まったこの仕事で培った経験を、なんとか若い世代につなげたいと考えています。



景観園芸部 主任 中井 さとみ

現在は三宮南花壇の管理を担当しています。今までで印象に残っているのは初めてコンペで取れた北野異人館周辺の花壇の仕事です。北野は結婚式場が多いので「北野マリッジ」をコンセプトにエリア全体をバージョンロードに見立て、ドアオブジェと鐘をつけたチャペル風の花壇を等間隔に並べるなどしました。社内でも高評価で得意先の方にも喜んでもらえ、自分の中でも達成感のある仕事となりました。

神戸市は今「Living Nature Kobe」として彩りだけではなく自然な風景を取り入れる空間づくりをテーマに掲げていて、今後は新しく扱う植物もあり今までと違うアプローチでの取り組みも必要となりそうですが、現在担当している3年間の三宮南花壇の管理の中でも、しっかりやり遂げたいと思っています。





景観園芸部 係長 浅井 幹穂

観葉植物などのリース業務を担当しています。お客さまと打ち合わせをして、設置場所の環境や植物の見え方を考慮し色合いや高低差、成長した時のバランスなどを考えて、植え付け・設置、定期メンテナンスなどを行います。

たまに「おまかせ」と言われるとやりがいを感じます。季節の花苗は把握していますが、予定していた花苗が無い時はその場で代わりを探し、納得がいかない時は稀にですが小売店で購入することもあります。

また門松の制作も担当しており、オーソドックスな門松だけでなく、オリジナルの水引をコーディネートするなど、あまり市場にないデザインも取り入れています。リースの仕事もそうですが、とにかく毎年お客さまに喜んでいただける仕事をしたいと思っています。



景観園芸部 辻 双一郎

神戸総合運動公園や「しあわせの村」の花壇管理を担当しています。爪に土が入るような仕事が人間的で良いと思いこの仕事を選びました。私が入社した頃は花の需要が高く、仕事が忙しい時代でしたが社内結婚も多く、好きな仕事と楽しい職場で過ごしてきました。

神戸市の花壇管理の仕事はコンペ形式で、準備が大変ですが個々が得意なことを持ち寄って挑むので、勝ち取った時の嬉しさは格別です。金額で決まる入札とは違い、自分たちの企画通りに施工できるのでやりがいもあります。長年コンペで高い実績を収め、誇りを持って仕事をしていますし、神戸の中ではどこにも負けてないと自負しています。私はあと数年で引退しますが「二楽園」がさらに繁栄して、この出身だと胸を張れる会社として存続して欲しいと思います。



景観園芸部 後藤 真衣子

以前は自然とアートを楽しむ空間での仕事をしていたのですが、植物を扱う仕事をしたいと思うようになり転職しました。今は「しあわせの村」の花壇や須磨離宮公園の温室管理を担当していますが、学ぶことが多く先輩方に相談させてもらうことも多い毎日です。

植物が相手の仕事なので、植え付けた1週間後にしおれてしまったり、想定していたより成長して高低差が崩れてしまったり、思っていた以上に難しい部分が多いと感じています。

最近では、仕事によっては同業他社の方々と一緒に東京のガーデナーさんに教えてもらいながらの共同作業となることもあり、色んなお話が聞けて学びも多い毎日です。今後はもっと植物の知識を習得して、自分でデザインした花壇をつくりたいと思っています。



造園事業部



総合造園部 部長 田中 春彦

マンションや個人宅の庭園、バラ園の管理などを行う総合造園部で現場のサポートや各種書類の作成など、全体を管理する立場にあります。

今までで印象に残っているのは大型台風による土砂崩れで、担当していた公園の一部が跡形もなく潰れてしまったことです。待機していた公園事務所で大きな音を聞いて現場を見に行くと、何もかもなくなって言葉ができませんでした。設計からやり直しとなり擁壁をつくるなどの対策をとり、それ以後山の中の作業では付近に崩れる要素がないかも確認するようになりました。20年くらい前のことですが今でも忘れられない出来事です。

これからの課題は若い世代に技術をつないでいくことです。人材を集めることが課題ですが、職場の士気も上がるのでなんとか解決策を探りたいと考えています。



総合造園部 次長 牧野 勝良

庭園の設計施工担当を経て、現在は地域の里地里山の景観を保全再生して残す国立公園「あいな里山公園」の管理をしています。具体的には園内に自生する希少植物の保全管理で、特に最近は外来種が増えているので、もともとある植物を守り、見せていくための管理をしています。

園内では生態系を守るために農薬や消毒薬を使っておらず、メダカやトンボなどが多く存在しています。植物も虫も排除され続け外来種が増加した現状を考えると、本来はこれが正しいかたちで、排除ではなく共存していくことが大切だと感じています。

今後はこれまでの経験を活かし、園芸品種にない雰囲気を持つ日本の在来品種を使って現代風の庭園つくりたいと考えています。もともと自然に携わる仕事があったこともあり、植物を使ったアプローチを考えるのはとても楽しく、この仕事は天職だと思っています。



総合造園部 次長 掘井 克朗

個人宅の庭園やバラ園の管理が主な業務で、現場では当日の作業人数に合わせて全体のバランスを考えながら作業の進行管理もしています。

個人宅の庭園管理ではお客さまに満足していただくことが最も大切で、お客さまごとの希望を読み取った上で仕上がりを考えますが、単に剪定だけではなく植物の気持ちになって作業をしないと植物が応えてくれません。全体のバランスを見ながら弱っている部分を剪定したり、肥料をあげたりしますが、肥料をあげたから元気になるということでもなく、特に今年のような猛暑の夏には注意が必要で、樹木の様子をしっかり見ながら対応しています。

お客さまとの向き合い方、植物との向き合い方は30年経っても毎回難しく感じますが、その難しさも含めて自分には合っている仕事だと感じています。





総合造園部 臼井 健雄

バラ園や個人宅の庭園管理が主な業務で、バラ園の管理は30年前から担当しています。バラ自体は強い植物ですが、天候に左右されやすく特に猛暑の年は害虫が付きやすいので注意が必要です。また、バラ園ではずっと咲かせるための管理が大変で、本来は春と秋が見頃ですが、多くの方が来園する5月のGWに満開の状態を持っていくために、冬の剪定作業から意識して管理しています。

美しいバラを育てるためには葉を良い状態で維持することが重要で、長年の経験で葉を見れば状態はわかりますが、状態に合わせて作業を変える難しさもあります。天候不順や長雨で葉の状態が良くなりず困ったこともあります。毎日向き合うことでまた元気になってくれるので、日々の手入れを淡々とこなすことが大切だと考えています。



総合造園部 主任 栗林 裕太

六甲アイランドのマンションの年間管理を担当しています。剪定や除草作業は、雨の日や夏の暑い日など気候の厳しさはありますが、もともと植物に興味があって選んだ仕事なので、健康的かつストレスフリーで毎日楽しく働いています。

作業内容は年間を通して違うので、最初の1~2年は慣れませんでした。先輩方に比べて仕上がりや作業スピードなど、まだまだかなと思う時もありますが、時間がかかっても先輩方に「良くなってきた」と言ってもらえると嬉しいです。

特に剪定作業は見た目にはわかりにくいですが、細かい部分に差があるので今後は技術面をさらに磨きたいと考えています。



造園事業部付 高井 秀子

アルバイトとして入社し、最初は公園の灌水作業を担当しました。事務職の経験しかなかったので、花や植物と触れる仕事が楽しく、雨上がりのぬかるんだ現場で滑って転んだり、カラスにお弁当をとられたりしましたが、それさえも楽しく充実していました。数年後、本格的に働いて欲しいと声をかけてもらい正社員になりました。

事務職の先輩が退職したのをきっかけに、現在は受注処理や請求書、仕入れ関連の事務処理を本社の経理部と連携しながらしています。数年ですが現場を経験したことで、現場の気持ちに寄り添いながら事務処理と経理部を円滑につなげられていると思います。

私は「二楽園」で初めての女性作業員でしたが、今後は女性がもっと増えると思うので、子育て世代など多様な働き方へのフォローもしていきたいと思っています。



『for Amenity “G” life』直売部と造園事業部を

生花・鉢花・観葉植物・インテリア・ガーデニング用品などの小売事業。

一般住宅の庭園工事から民間企業・官公庁施設の大規模造園工事まで幅広く行う造園事業。

二楽園ではどちらの事業も常に『for Amenity “G” life』をコンセプトに行っています。

直売部

いつもお客さまの満足を最優先に、品質・季節感・バリエーションにこだわりを持って品揃えしております。ギフト用やご自宅用はもちろん、お祝い・お供えスタンド花、企業さま・店舗さま・講演会や壇上のディスプレイ・生花の活け込みなどさまざまな御注文を承っております。

取扱商品

胡蝶蘭・鉢花

胡蝶蘭はお祝いから仏事まで、さまざまなシーンで選ばれるお花です。花色や大きさなど、お値段も幅広い胡蝶蘭だからこそ「二楽園」では常に豊富な品揃えで、贈るシーンやご予算に合わせた胡蝶蘭をお選びいただけます。



観葉植物

開店祝いをはじめさまざまなギフトやインテリアとして最適な観葉植物。大きく育つものや下垂するつる植物など、贈る相手やお部屋の内装に合わせてお選びいただけます。



生花アレンジ

大切な方へのお誕生日プレゼント、季節のご挨拶、昇進・昇格お祝い、送別会・退職祝いなど、ご予算・シーンに応じたアレンジメントをご用意してお待ちしております。



お供えのお花

お盆や新盆、お供え、お悔やみのお花など、故人を偲ぶお気持ちをお花に込めてアレンジ。「二楽園」ならではのこだわりのお花でお届けいたします。



岡本本店1・2Fでは、観葉植物やガーデンアイテムのほか、雑貨・インテリアなども豊富に取り揃えています。見ているだけで幸せな気持ちになれる、暮らしをちょっと豊かにするアイテムを厳選してお届けします。



両輪に「総合力」を発揮。

『for Amenity“G”life』

私たち二楽園は『for Amenity“G”life』をコンセプトとして緑と花
いっぱいの美しく豊かな街、自然と共生できる環境づくりをめざし、
地域社会に役立ちたいと考えています。《G:green, garden, gift》

造園事業部

官公庁を中心とした造園事業のほか、一般造園工事やエクステリア事業、
お庭のメンテナンス、ホテルや店舗向けグリーン装飾、オフィスやマンション、建物等の景観事業を行います。

総合造園部

大学やマンションなどの大規模緑化管理を行う緑化メンテナンス
や、岡本から芦屋エリアを中心に個人邸のお庭の植木や芝生の
手入れ、害虫駆除などを行う個人邸植栽管理が主な業務となり
ます。また、公園整備工事や街路・緑地管理作業など公共事業
多数実施してきました。

環境緑化部

個人邸の庭園を中心に病院や介護施設などの設計から施工、管
理までを行います。

景観園芸部

◎神戸市公共花壇管理

神戸市の公園や公共花壇の管理を行います。毎年実施される花
壇コンペで花壇のデザインや季節のイベントの装飾提案を行い、
企画から施工、年間の管理までを行います。

◎西宮市公共花壇管理

西宮市の北山植物園やバラ園の管理業務などを実施。担当者を
常駐するなどして年間を通した管理業務を行います。

◎飾花・装飾リース

大手ハウスメーカーのマンションギャラリーや駅コンコースなどの飾
花・装飾リースとして、植物の設置から定期メンテナンスを行います。

◎緑化メンテナンス



ラヴィマーナ神戸

◎個人邸庭園管理



◎公共公園整備工事

◎公共管理作業



ホテルプラザ神戸

総合
造園部

造園
事業部

景観
園芸部

環境
緑化部

◎民間・個人邸庭園設計・ 施工・管理



介護老人保健施設「いつでも夢を」

◎神戸市公共花壇管理



市役所前実験花壇



須磨離宮公園観賞温室



三宮駅前花壇



三宮ヒーリングガーデン

◎西宮市公共花壇管理



すみれ台バラ園

◎飾花・装飾リース



神戸空港ロビー



塩瀬中央台バラ園

事業所

本社

〒658-0072 神戸市東灘区岡本1丁目2番17号
TEL/FAX 078-452-6177
<http://www.nirakuen.com>
グループ各店、各事業部門の統括管理。



株式会社二楽園 造園事業部

〒659-0028 芦屋市打出小槌町1番6号
TEL 0797-31-2801
FAX 0797-22-2839
一般住宅から官公庁分野までの造園土木部門を担当。



店舗

岡本本店

〒658-0072 神戸市東灘区岡本1丁目2番17号
TEL 078-441-2841 FAX 078-441-2843
1F 生花・鉢花
2F グリーン・インテリア
2F 屋外 ガーデンプロムナード



二楽園イオンモール 伊丹昆陽店

〒664-0027 伊丹市池尻4丁目1番1-1F
TEL/FAX 072-784-8701



NIRAKUEN basic

〒651-1302 神戸市北区藤原台中町1丁目2番2号
エコーリラ3F
TEL 078-987-5525



会社概要

社名	株式会社二楽園
本社所在地	神戸市東灘区岡本1丁目2番17号
創業	1923(大正12)年
代表者	奥谷 信秀
資本金	7,126万円
従業員	60名
主要お取引先	官公庁、総合建築業、 建築設計事務所、 デザイン事務所、学校、病院、 ホテル、サービス産業全般 など
主な加盟団体	一般社団法人JFTD 一般社団法人神戸市造園協会の 一般社団法人兵庫県グリーン協会 新しい園芸を考える会

役員

代表取締役社長 奥谷 信秀

専務取締役 林 悦久

常務取締役 奥谷 雅博

取締役顧問 林 泰仁

取締役 奥谷 知子

監査役 松本 清子

監査役 奥谷 優子



左から
取締役 奥谷 知子、取締役顧問 林 泰仁、監査役 松本 清子、
代表取締役社長 奥谷 信秀、専務取締役 林 悦久、
常務取締役 奥谷 雅博

沿革

1923(大正12)年	創業者・奥谷奥之助が、神戸市東灘区岡本に「二楽園」を設立。米国式の大温室を建て、カーネーション、バラ、洋ラン、トマト、マスクメロンなどを栽培。
1941(昭和16)年	奥谷奥之助が53歳で急逝。奥谷惟之が二代目園主として「二楽園」を引き継ぐ。
1945(昭和20)年	神戸大空襲で、大温室は大破。終戦後、再建に奔走する。
1946(昭和21)年	進駐軍のPX(購買部・現在の神戸大丸)で園芸栽培品を販売し、小売業のスタートを切る。
1948(昭和23)年	二楽園種苗園芸株式会社を設立(資本金195,000円)。奥谷惟之が取締役社長に就任する。
1950(昭和25)年	造園部と貸鉢部を開設し、造園事業やインドアグリーン事業の基礎を築く。
1955(昭和30)年	兵庫県、神戸市、西宮市などから造園・土木工事の発注をいただくようになり、官公庁の造園諸工事分野にも事業を拡張する。
1959(昭和34)年	社名を二楽園総合園芸株式会社に改称する。
1967(昭和42)年	資本金を260万円に増資する。
1977(昭和52)年	資本金を1,300万円に増資する。
1980(昭和55)年	芦屋店・パフィオ DE ニラク オープン。
1988(昭和63)年	資本金を2,600万円に増資する。
1991(平成 3)年	六甲アイランドの拠点として六甲アイランド店がオープン。
1997(平成 9)年	神戸ファッションプラザ店オープン。
1998(平成10)年	阪神事業本部を開設し、造園事業部門を拡充する。
1998(平成10)年	二楽園グリーンステージがオープン。
1998(平成10)年	奥谷惟之が取締役会長に就任、奥谷信秀が代表取締役に就任。
2000(平成12)年	本社ビルが竣工、本店もリニューアルオープンする。
2002(平成14)年	神戸ファッションプラザ・ニラクエンオープン。
2003(平成15)年	資本金を4,976万円に増資する。
2003(平成15)年	二楽園総合園芸株式会社創業80周年を迎える。
2009(平成21)年	西神中央店オープン。
2012(平成24)年	ニラクエン北神戸店オープン。
2012(平成24)年	甲南山手店オープン。
2013(平成25)年	社名を株式会社二楽園に改称する。
2017(平成29)年	北神戸basicオープン。
2017(平成29)年	イオンモール伊丹昆陽店オープン。
2018(平成30)年	資本金を7,126万円に増資する。
2019(平成31)年	NIRAKUEN basicオープン。
2023(令和 5)年	株式会社二楽園創業100周年を迎える。

NIRAKUEN
SINCE 1923

 株式会社 二 楽 園

〒658-0072 神戸市東灘区岡本1丁目2番17号
TEL/FAX 078-452-6177
<http://www.nirakuen.com>

